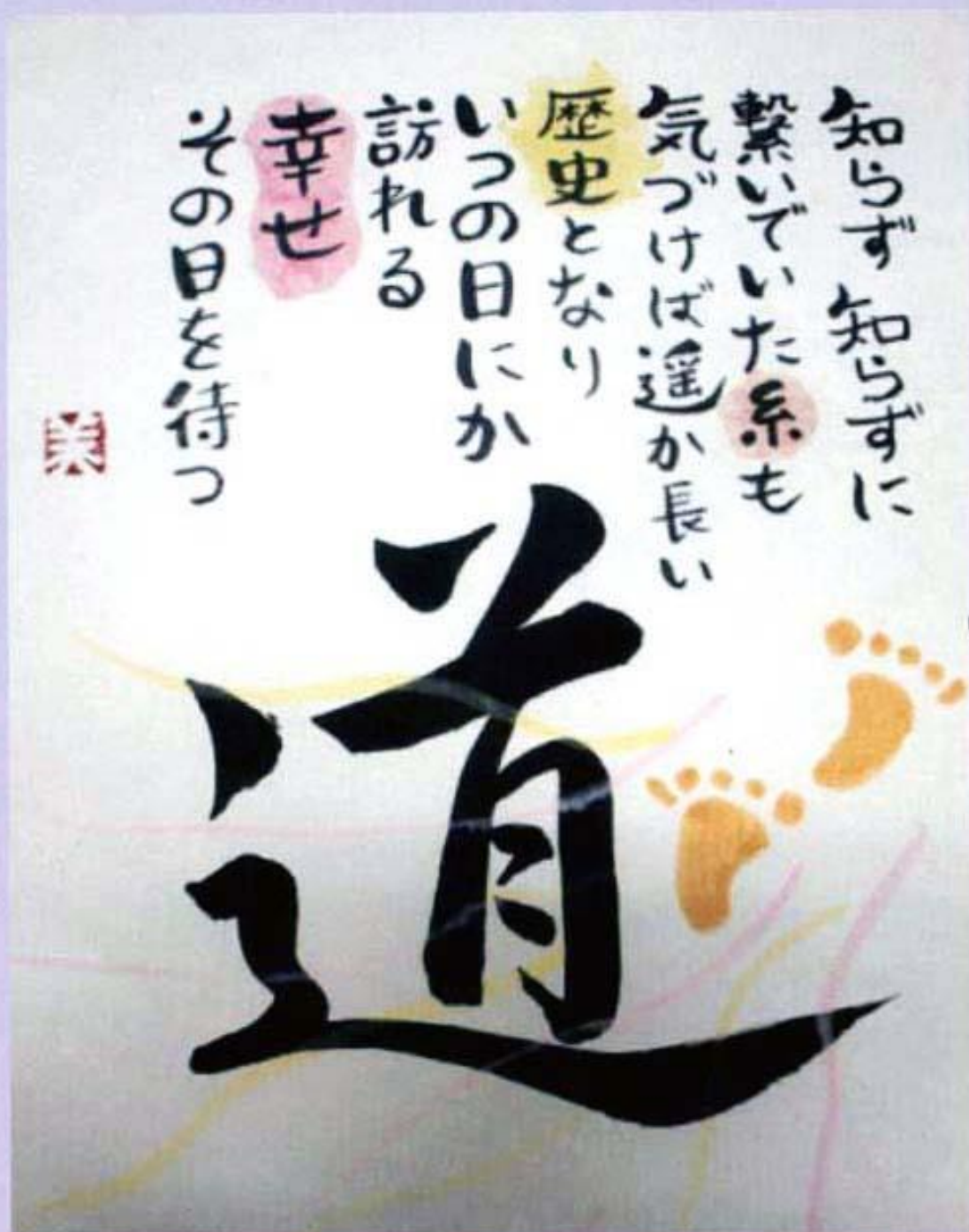


双ヶ丘



目次

- 巻頭言
京都の榮譽 二題
蠟染め一筋 佐野猛夫
板書の思い出
三S主義を恐れる
俳諧を心の糧に
続 楊貴妃
山田風太郎と北杜夫
茫々六十六年前
三中、囲碁・将棋
滅塩
渾身の一本
空の散歩
吉田監督の殿堂入り
宇宙開発四十年
ザビーネ先生とドイツ
ドイツ・フランス道中

タイトル：『道しるべ』

3年4組 信秋 美織

平等な時間のなかで誰もがいきていること、
今日に至るまでに一人一人の背景にはたくさん
の歴史があること、必ず幸せはおとずれるとい
うことが、ストレートに表されている詩です。

どんな人にでも『今の自分があるのは昔の自
分がいるから、そして今の自分もこれから先の
未来のために生きている』ということが伝えら
れるこの詩に強い印象をもちました。

この詩に出会った頃からずっと私はこの詩に
たくさん励まされています。この詩の言葉の一
つ一つが私にとって大切な支えになっています。

写真撮影：公民科 渡邊 一郎

言 頭 卷



がんばろう

会長 森 貞 男

京三中・山城高同窓会活動の一つとして会誌を復活することになり、二年が経ちました。

今回は五号が計画され、多くの会員のご協力により発行する運びとなりました。

また、山城高在校生の資質向上のため同窓会員の方が夫々の歩んで来られた道を話して聞かせる「山城高二十一世紀塾」が七月十一日で二十四回目（第一回は平成十五年一月）となります。

これらの事業をもっと盛り上げるよう、より多くの方々に関心を持って頂きたいと思います。

在校生との接点をより多くすることで「山城の良さ」をもっと知って貰うことや体育クラブ活動でも、かつてのように全国大会で活躍するのが当たり前という強い気持ちをもって日々励んでもらいたい。プレーするのは自分自身、その気になれば実現できる。

京三中、山城高の先輩と現役が丸となって邁進したいものです。

がんばろう、山城高！

京都の栄誉二題

山城高校出身のお二人が今年また、輝きを放った。お二人は27年度卒業の吉田義男さん(77)と、28年度卒業の前原英彦さん(76)だ。元阪神タイガース監督の吉田さんは京都市が制定した「京都スポーツの殿堂」入り第1号、京都府スケート連盟副会長の前原さんは平成22年度京都府スポーツ賞特別栄誉賞を受賞した。

京都市

京都スポーツの殿堂



吉田さん(山城4回卒)は160㌢の小柄で、阪神の遊撃手としての現役時代、舞うが如く華麗な守備ぶり

は「牛若丸」の異名をとった。山城高校で甲子園に出場、立命館大1年で阪神入り。盗塁王2度、ベストナイン9度、1985年に監督として阪神を日本一にした。5月12日付け京都新聞朝刊の談論風発欄で、山城高出身の京都新聞編集局総務・仁田一明氏が吉田さんの三振の少なさは、打撃の神様・川上哲治さんも抜き、日本一だったと隠れた記録を紹介、選球眼がいかに抜きん出ていたかを物語っていると書いている。殿堂入りに際してのコメントは「多くの友や指導者に支えられた。世の中が大変な時に、このような賞をいただいて…」と吉田さんらしい謙虚な言葉だった。

京都府

京都府スポーツ賞特別栄誉賞

前原さん(山城5回卒)は福知山市出身で、家族と共に6歳で開拓団として満州に渡り、自然とスケートを覚えた。



戦後、原谷の開拓で頑張り、山城から立命大入りしている。京都府スケート連盟は昭和33年からの役員で、理事、理事長、副会長の要職を歴任している。平成3年からは日本スケート連盟の理事でもある。昭和57年国体でフィギュア成年女子優勝、昭和61年からフィギュア少年男子3連覇など、京都のスケート界を育て、牽引してきた。京都新聞ホームページに「京都スポーツあらかると」というコーナーがあり、前原さんが冬季国体出場50回のことが写真付きで記事になっている。国体バッジが並ぶ北区原谷の自宅で取材を受け「バッジを見ると、すべての大会を思い出す。幼い日に覚えたスケートを最後まで貫き通せるのは私の誇り」と話している。

お二人の受賞、山城高校の輝きであり、先輩も後輩も同窓会一同、心から大きな拍手を送り、これからもご活躍願ひ、母校をあたたかく見守っていただければ…と思う。

蠟染め一筋、水をテーマに 追いつけた佐野猛夫氏

三十三回 公手達郎

○はじめに

蠟染めの大家で染色工芸家の佐野猛夫氏（一九一三～一九九五）は、京都市立芸大教授をされていた頃から私共と同じ隣組の住人として町内に生まれ、私共と触れ合いの多い日常を過ごされましたが、とくに私の場合は、リタイアして自由の身になってから足繁く市内の美術館へ通ううち、度々館内でお会いする機会が増え、作品の見方や接し方などについてご教示をいただくなど、美術鑑賞について目を開いて頂いた面が少なくありません。私も同氏を先生と呼びしておりましたし、そんな事情から、今回は同氏を先生という表現を用いて記事を進めたいと思います。

○先生の作品について

先生の作品の底には、清純・軽妙で華麗な詩情が流れているような感じの作品が多いと思います。はじめは、具象的な作品を手がける染色工芸家として出発されましたが、昭和三十年代に入ってから次第に抽象の作品を志すようになりました。

この抽象作品の底に、先生特有の詩情が鮮やかに光っているのです。抽象作品を手がけるようになってからの先生は、一貫してテーマを水にしぼり、これを追いつづけられたように思われます。

先生の水作品には、深い沼を思わせるようなものから、音をたてて渦巻く海の潮を思わせるものまで、実に多彩といえます。恐らく先生は、生命の根源である水の魅力にとりつかれた芸術家だったのでしょう。

先生の作品を一つ一つ見ていくと興味は尽きません。恐らく先生は、現代染色芸術の最高水準にあられた作家であり、

その高い芸術の理想は今後受け継がれて行くことでしょう。

○蠟染めを志す

先生は大正二年、滋賀県の守山で生まれ、長浜で育ちましたが、両親とともに京都市出身ということでした。少年時代から画家希望でしたが、京染めを手がけていた実兄（手描き友禅で独立）の家から京都市立美術工芸学校へ通学するうち、兄の仕事を手伝うようになり、次第に染色を志すようになったということです。学校の自由課題で蠟染めを試みたのが手始めで、すっかり蠟染めの魅力にとりつかれてしまい、蠟染めを目指すようになります。

兄が手がけていた友禅は、工程が複雑で、分業でなければ成り立ちませんが、蠟染めなら最初から完成まで一人でやれるからです。

しかし、久しく絶えていた蠟染めの技術を指導してくれるような師はなく、独学で図書館に通い、写真図版などで手

探りの研究を重ね、試行錯誤の末、卒業の翌年に縦二・五米、横一・八米の蠟染め作品を完成させました。この蠟染めの処女作を昭和八年の第十四回帝展に出品し、初入選を果たしたのです。

○染め一筋に半世紀

我が国に残る最も古い染色の一つとして正倉院に伝わる藤織、すなわち蠟けつ染めは、奈良時代に伝わり、既に型を使ったものもあり、同一模様を繰り返す量産方式をとるものもあったことが知られています。平安時代に海外との交流がと絶えるのと共に滅び、以後、近代まで見ることが出来なくなつて、幻の技術となつていたのですが、昭和初期から関心をもつ人達があらわれ、復活を見たのは最近のことなのです。

この蠟染めに現代の息吹を吹き込んだのが先生であつたといえましょう。そもそも染色工芸が絵画や彫刻と並んで、帝展で公募されるようになったのは、先生が入選を果たした第十四回帝展の僅か六

年前のことでした。それまでの工芸は、芸術として扱われなかったのです。

先生は、染色工芸が芸術として認められるようになった黎明期から現代にいたるまで、蠟染め一筋に半世紀以上、強靱な作家精神で染め抜いてきた生え抜きの染色工芸家だったのです。

○恩師との邂逅

初入選を果たしたとき、この無名の新人を訪ねてきた人がありました。後に彼の恩師となる小合友之助氏（二八九八―一九六六）でした。彼は「自分達は図案家を業として、その傍ら染めをやってきたが、君は染めだけで作家としてデビューを果たした。」と喜び、励まし、同業の稲垣稔次郎氏（一九〇二―一九六三）等を紹介してくれました。小合、稲垣の両氏は、我が国における近代染色の偉大な先達であり、京都の優れた染色家は、ほとんどがこの二人の薫陶を受けたといつても過言ではありません。

先生も、この二人の師から実に多くのものを見、多くのことを学びました。十五才年長の小合氏からは創作者の心と審美眼を、十二才年長の稲垣氏からは暮らしの美学を教えられ、時期のズレはありますが、先生を含めて三人とも京都市立芸大の教授として染色工芸を教え、多くの人材育成に貢献しました。

○抽象への道を目指す

その後、新匠工芸会への参加など、紆余曲折はありましたが、結局日展への出品をつづけることになり、昭和三十年には、初めて日展審査員を体験します。この頃、上梓された小品集の序文に、抽象に徹した制作をもとめて歩み続けたという意欲をハッキリ述べています。

その意志どおり、この頃から自然のたえずまいをとらえた抽象風の作品が日展会場を飾るようになり、さわやかな前衛派として一作ごとに注目を浴びるようになります。また、この頃から先生がライフ・ワークとして追求することになる「水

をテーマにした作品」が登場してくるようになります。

昭和三十四年の「柳」は先生作品に抽象的な表現が見られるようになる最初のものといわれています。動きのあるものの形づくりや、目に見えないものの形を生み出していく、風とか水とか。翌年の「水生」は、深泥池で取材したものと、鍛んだ水面が徐々に動き出して、さながら生きものの達がその存在を主張しているようであり、暖かい色調は、春の曲を奏でているような感じです。

○「潮」シリーズの登場

先生の後半生の大きな仕事である「潮」シリーズが出てくるのは、昭和四十年代に入ってからになります。これまでは見られなかった大きな潮の鼓動が大自然の気宇を漲らせます。四十四年の「黒い潮」は文部大臣賞を受賞し、先生の記念碑的な作品となりました。

飛行機から見た大河が蛇行する様や、

雲の影が海に映る印象、大海原をキャンパスにした大胆な抽象絵画、人智の及ばないような大きなスケールへの挑戦、そうした諸々の要素が、この「黒い潮」に結晶したのでしょう。

四十七年の「噴煙の島」では芸術院賞を受け、大海原の只中であって、潮に飲み込まれまいと、大波をかぶりながらも毅然として踏ん張る島、ここにも潮に向かって必死に挑んでいるかのような先生の心境が窺えます。

こうして五十一年には「潮路」が制作され、波の間を縦に歯切れ良く躍る潮が大きく走り、黒味がかかった海の色に爽やかさすら感じさせます。さらに、同じ年「潮の譜」など一層明るい色調の海が空間に広がる作品を発表し、先生の海への気持をテーマとした何点かの連作が制作されました。

○新たなものづくりへの挑戦

しかし、翌年には、作品は潮を離れて静かな水の様相を主題とした表現に

変わり、潮の力強さは影を潜めてのんびりとした淀んだような水、静止したような水の動きが微妙に表出するようになります。

沼に遊ぶ鯉や水中の亀には、幻想的な静けさが漂い、静寂で暖かい世界を想わせます。二、三年、静的な作品が続いたあと、再び潮をテーマにした動的な表現に変わっていきます。「掛かる潮」（昭和五十八年）では抽象化がさらに進み、翌年の「ゆらく景色」は、海上に浮かぶ珊瑚礁と魚を夢幻的に描いています。

既に昭和五十四年に六十六才で京都市立芸大教授を停年退官しており、普通人なら気促な生活に入っている頃なのですが、先生の場合は、逆にその作風には思い切った表現が試みられ、ものづくりへの新たな挑戦がはじまっていたのです。昭和六十年の「夢幻」は、緑のトーンのなか、霧に覆われた森を彷徨するような表現で、新芽のような形は、緑の妖精を思わせ、見る者を夢幻の境地で妖精

と戯れるような心地にさせる作品です。「夢幻」が幻想の世界なら、翌年の「生成」は黄色の生命力に充ちた現実の世界なのでしょう。命の輝きが黄金色に映え、生きることの歓びを伝えてくるような作品です。どの作品にも言えることは、自然の再現ではなく、先生の心に映った自然を自由に創造されたものであるということです。

○清純・華麗な吟遊詩人

蠟染めは、塗り返しの利かない一筆仕事であり、確かな表現技術をもたなければ出来ない芸術であるといわれます。先生は、作品には腕の冴えを見せますが、工芸家である前に自然の美を称える詩人でもあったのです。事実、先生は「骨」という詩人グループの同人であり、同人誌に詩を発表することはありませんでしたが、先生の作品の底には、清純・華麗な詩情が流れています。先生は文字で表現する詩こそ作りませんでした。詩人との交流を通じて心の底深く醸成された

詩情を、言葉ではなく、染色芸術という形で表現されたのでしょうか。作品を見る私達も、自然に潮騒の詩に耳を澄ますことになるのだと思われまう。先生は、水を海を波を蠟染めで再現することをライフ・ワークとされました。自然の表情を豪快に、時には平穏に、あるいは艶やかに蠟を駆使して無数の詩を贈り続けられたのです。

我が国の自然や風景を根底に据えながら、欧風的な思考を身につけ、自然との和やかな触れ合いのなかに、制作にあたっては厳しい技術で引き締める。それでいて、作品から受けるイメージには、全く堅苦しさはありません。自然を再現するのではなく、心に映ずる自然を自由に創造されたのです。従って、染めあがった作品は、どこまでも先生の心象風景となります。作品には軽やかなリズムが流れ、さわやかな詩情が立ち込め、文字どおり自然の美を讀める吟遊詩人となられたといえましよう。

板書の思い出

三十四回 西村 勇

「Man is a social being」。公民の時間の冒頭、田中實雄先生が黒板に大書された英語のこの一文は、いまでも脳裡にあざやかである。

「公民」とはどういう教科だったのか。京都府立図書館に所蔵されている教科書を何冊か見たが、我が家から始まって、地方自治・貨幣・金融・産業・交通にいたる項目は、どの教科書でも大差はない。ただ、なかには、大正末年から昭和初頭にかけて発布されたいくつかの勅語を巻頭に掲載し、「国体観念を明確にすることに意を用いた」と緒言に書いているものもあった。しかしそういう忠君愛国というか戦意高揚を、先生が力説されたという印象は全くない。「修身」のときのように、ねむくはなかったし、むしろ一生懸命授業に耳を傾けていたように思う。

先生は縦のつながりを重視するより、横への広がり強調されたのではなかったか。英語で書かれた冒頭の板書「人間は社会的存在である」という一文は、先生の教育方針の宣言でもあったのだろう。

田中先生には、もう一つ忘れ得ぬ思い出がある。期末試験で論述式の問題が二つ出た。そのうちの二問は、前の晩に全く復習していなかったのに「ヤマが外れてしまいました」と書いて白紙で提出した。二問のうち二問は何の答えも書いてないのだから、普通に考えると零点、従って公民の成績は二問あわせて、よくて五十点のはずである。ところが学期末にもらった通知票には、たしか八十五点とあったように思う。落第点どころか優良点がついていたのだ。

田中先生は私の白紙答案を見て「この野郎、生意気なことをしおって」と思われたに違いない。しかし、私の心のどこかには、田中先生なら落第点をつけるようなことはされるはずがないという、先

生をためすという甘えの気持があったように思う。高学年ともなれば、先生との間に微妙な心の往来があるものなのだろうか。

板書についてのもう一つの思い出は、小澤和一先生の「國語」の時間のことである。俳諧史について教えておられたのであろう。「ものは付け」という形式について説明された。たとえば「美しきもの」「赤いもの」といった決めことばの下に、それに合ったうまい文言をつづるといったやり方である。「早きもの」の作として二例を挙げ、黒板に書かれた。そのうちの一例は何と書かれたのか、全く記憶にない。もう一例、黒板に書かれたのは、次のようなものである。

「早きものは、嫁に行きし娘、はや子持ち」

とあった。

ところがである。その時、廊下にコツコツという足音が響き、藤森校長が授業視察に回ってこられたのだ。校長の授業視察など、めったに無いのである。驚

かれた小澤先生は、くだんの「ものは付け」の文言が、廊下の藤森校長からは見えないように、すつと身体を右に寄せられた。この時の小澤先生の、始めはいささかドギマギし、やがて微笑に変わられた表情はよく覚えていた。

いまのご時世なら、校長に隠さねばならぬような内容では、もちろん無い。しかし、大東亜戦争下の中学生に、わざわざ披露すべき文言でなかったことは確かである。先生にしてみれば、堅い話ばかりの授業のなかで、ちょっと「サーピス」をされたのだろう。しかし、タイミンがが悪かった。

板書にまつわる二つの思い出を記した。どちらも中学四、五年生の時のことである。

板書にも時代が反映されている。

おとめごに席譲られて思
わずも 年をかくして力
む吾かな
(詠み人知らず)

三S主義を恐れる

—日本丸はどこへ行く—

三十五回 大島 達也

かつて、ある大国が植民地政策、移住民政策として、人間を馬鹿にするため、まともな教育をおこなわず、スポーツ・スクリーン（映画）・セックスの三つのSに夢中にさせる政策をとった。

このことに目覚めて帝国主義から解放しようとして、一〇〇年前に中国の孫文が唱えたのが、民族・民権・民生に力を入れた三民主義である。この三民主義が成功したかどうかは、今の中国の政治を見れば疑問である。

さて、今の日本はどうだろう。さきの大戦に敗れた結果、憲法は与えられ、教育は日教組によって古い伝統、歴史や愛国精神は無視され、まさに三S主義にドップリと浸った国民は、「一億総馬鹿」になっているのではなからうか。

法外な高額報酬を得て英雄視されているスポーツ選手。それにあこがれて、我が子を幼少の時から名選手にしようと

必死になっている親。無知無能を面白がる番組ばかりのテレビや、携帯、メール、ゲームに夢中になっている幼・少・中年。奇抜な服装で変な日本語を喋りながら街を闊歩する若い女性。離婚と不倫を手柄のようにして家庭をかえりみない主婦。骨抜きにされたような男性等々まさに枚挙にいとまがない。

自己中心で、他人のみならず親子でも殺し合うに至っては畜生にも劣る。

さきの大戦後、植民地は続々と政治的に独立した。そして、真の独立を勝ちとろうと、今、各地で民主化運動で騒いでいる。ところが日本は、今の状態が続くなら逆に大国の植民地になってしまうのではなからうか。

すでに戦後アメリカの植民地になっているという説もあるが、アメリカの軍事基地を日本国外へ移せと騒いでいる日本を見て、日本を自分の国の植民地や領土にしようとする手ぐすね引いて喜んでる国が、日本の近くにあることを忘れてはならない。

羅針盤を持たない日本丸は、どこへ進もうとしているのか。本文は、日本の将来を憂える私個人の見解であります。

俳諧をこころの糧に

三十五回 奥 照夫

野に川に丹波路霧を生みつづけ

の私が自費出版した句集「丹波路」に掲載した句が、朝日新聞の平成十八年の十月十八日の大岡信の「折々のうた」に解説付きで掲載され、多くの知人より祝福の言葉を頂いた。

この「折々のうた」は足かけ二十九年にわたり大岡信がこれだと思う俳句や短歌を選び出して連載されたものであり平成十九年三月まで続いた。

長年、趣味として俳句を楽しんで来た私「てるを」としては望外の喜びであり、その後に出版された岩波新書の「新折々のうた」にも掲載されて有名な俳人に混じって紹介された。また、朝日新聞社が十九年七月に出版の「精選折々のうた」にも掲載された。生まれ故郷を歌ったこの句が、大岡信の目に止まったことは運命の悪戯とも言える。

その後、平成十八年十二月八日の朝日新聞の夕刊の「素粒子」に、

十二月八日一生狂はせり

の句集「丹波路」の中の一句が取り上げられ驚いた。戦争が始まったのが中学三年生の暮れ、そろそろ進路を決めねばならぬ時期であり、私は近視で眼鏡を掛けていたので家計と相談しながら近隣の高商をと考えていたが、宣戦布告により進路を変えざるを得なかった。その気持ちを率直に歌った句である。

この句の掲載にも北海道の知人から祝福の第一報が入るなど暫く騒がれた。またこの句は、最新の権威ある角川書店の俳句歳時記の冬の部の季語十二月八日の例句として取り上げられている。

私は、現在、二つ（東京、城陽）の結社に属し、月に六つの句会に参加している。そのうち三つの句会が私が指導しているので手を抜けない。一つの句会には七句程度の句を出さねばならない。作るのは大変だが挑んでいる日々である。

俳句は趣味の一つとして若い頃より始め途中仕事に没頭して中断したが再開してから三十数年にもなる。

俳諧をこころの糧に去年今年と今年の新年俳句会に出句した。

続 楊貴妃

三十六回 高須 壽一

会誌六号で楊貴妃について書き、馬嵬で自殺させられたとあるが阿部仲麿が日本へ逃がしたの説ありと述べたが、原稿投稿後の八月二十日の朝日新聞「私の視点」で法政大国際日本学研究所教授（比較文化論・国際日本学）王敏さんの文章で、日本を三十年近く歩き、各地で中国やアジアとのゆかりのものを見つけてきた。増え続ける中国人の日本観光客の興味を、このような地方に振り向けることを考えてはどうかと述べ、山口県長門市にある楊貴妃の墓も例示された。

さらにその後、十一月十四日BS朝日開局十周年特別番組で、日中共同制作「伝説の美女 楊貴妃 藤原紀香……西安千三百年紀行……」が放映。中国テレビドラマ楊貴妃秘史で放映された物語が随所に映し出され、楊貴妃を演じたトップ女優殷桃と藤原紀香の楊貴妃に関する対談もあり、紀香を中心に瀬戸カトリーヌ

らが西安の案内をし、興慶公園にある阿部仲麿の歌碑（仲麻呂と刻字されていた）も映された。

当時の長安の都の説明では、東西九・七km南北八・六kmでシルクロードでイスタンブールにつながり、日本とは奈良とつながる世界最大の都で、平城京は、ここをモデルにするもの大きさであったとの由。今も市内にイスラム教寺院があり、多くの参拝者がいた。

紀香らが、楊貴妃ゆかりの宮殿や華清池の楊貴妃専属の浴室「海棠湯」などを訪れ、また、博物館などに収められている当時の女性の飾り物や、墓地から出土した人形や当時の物品など映され、当時の風俗が画がかれている壁画や、壁画修復場も紹介され、高松塚古墳の壁画は、これを参考に作られたと説明あり。

玄宗も楊貴妃も食した宮廷料理を紀香とカトリーヌがチャイナドレスで食し、内陸部には珍しい鮑など海産物やラクダのスープ等多くの食物が並んだ。

最後の馬嵬の近くにある楊貴妃の墓と、山口県油谷町にある龍伏山二尊院に

ある楊貴妃の墓と伝えられている五輪塔が紹介された。

手許にあるJTB発行の中国の、るるぶ情報版の楊貴妃の墓の記述で、楊貴妃を埋葬した土は、春になると白粉に変わって香りを漂わせ、その白粉をつける美人になるという伝説がうまれたため、若い女性がこぞ土を持って帰ってしまった。そのため、現在、墓は半円状の煉瓦造りになっている。墓を取り巻く回廊には、楊貴妃の非業の死を悼む詩の数々が壁に展示され、敷地内には彼女の像もある。と書かれている。一方るるぶ情報版山陰を見ると、二尊院の説明はないが、長門湯本にある温泉旅館玉仙閣の説明で、楊貴妃は、この地で生涯を終えたの伝説があると述べ、華清池の彼女専用の浴槽を再現し、貴妃湯と名付け、彼女の好んだ食事を出すとある。

油谷町にある二尊院について調べるべく図書館へ行ったら、人文社、角川書店、平凡社の地誌の説明はそれぞれ違うが、楊貴妃に関し、人文社は寺に伝わるところによるとして、安祿山の乱の時の天宝

15年(756)七月、船で当町唐渡口に漂着し、二尊院境内に葬られたという。とあり、墓地にある五輪塔は鎌倉後期の形態を示すが、古くから楊貴妃の墓と伝えられている(追善供養の墓)。この地は平家落人の伝えも多いので平家の女官の供養塔ではないかとみられている。とある。創建は延暦年間(782~806)で、本尊は発遣(人が誕生し人生の旅路に出る時に送り出す)の釈迦如来と、来迎の阿彌陀如来の二尊を祀るので二尊院と号する。このような例は京都の遣迎院と二尊院(嵯峨)と本院のみと書いている。

角川書店版では、大同三年伝教大師の創建と伝え、安置されている阿彌陀如来像と釈迦如来像は共に国重文で、釈迦如来像は玄宗皇帝が楊貴妃の追善のため毘首羯磨作のものを送ったと伝える。寺号二尊院は、毘首羯磨の同木同作の釈迦如来の尊像が日本に二尊あり、一尊は京都嵯峨の二尊院に、一尊は当院にあるので二尊院と称した(寺院由緒覚)。境内に残る五輪塔三基(県文化財)は鎌倉後期の作と思われるが楊貴妃の墓と伝える

(注進案……天保13年(1842)萩薄編。藩内全域の町村から注進させ、代官所が監修した村明細書)とある。

なお嵯峨二尊院のパンフレットでは、人文社の説明と同じで、角川書店版で述べている楊貴妃にまつわる記述はない。しかし応仁の乱で諸堂焼失した際、角川書店の嵯峨二尊院の説明では、長門の僧広明恵教の再興を経た(二尊院文書)とあり、人文社版でも同様の記述があるので、長門と嵯峨の二尊院は関係があるようだ。平凡社版では、楊貴妃に関する記述はない。

歴史は繰り返すと言うが、清朝肅親王第十四王女で日本の川島家の養女となり、後に川島芳子と名乗り男装の麗人として日本軍のため働き、李香蘭、日本名山口淑子、後の大鷹淑子とも親交があったが、さきの日中戦争終了で国民党に漢奸として処刑されたが、一説によると、身代わりを殺し本人は日本へ逃したとも言われている。今ごろ日本のどこかでひっそり生きているのかも知れない。

山田風太郎と北杜夫を読む

— 飢えと隣りあわせだったあの頃を回想する —

三十九回 板持 隆

今や飽食の時代である。テレビは終日食い物番組を流し続け、街には飲食店やマーケットが立ち並ぶ。家にあつても冷蔵庫には何らかの食い物が備蓄され、しかも賞味期限がどうのこうのと贅沢を言っている。その反動として思い出されるのは、何時も空腹を抱えつつ幻の食い物を追い求めながら過ごしていたあの頃のことである。

山田風太郎と北杜夫の終戦前後の日記と青春記を改めて読み直してみる。北は私より三年、風太郎は八年年上だが、あの頃彼らが味わった飢えの感覚は、程度の差はあれ、私の場合とそれ程変わりないのではないか。終戦の年、この二人は東京大空襲を経験し、その後は地方に移り食うや食わずの学生生活を送った。風

太郎は東京医専の学校疎開に従って飯田に、北は松本高校の入学で松本入りして、それぞれ終戦をそこで迎えている。

終戦直後の風太郎の日記に、故郷但馬に帰郷する際に京都駅で立ち往生した時のエピソードがある。彼は時間をつぶすために、友人と二人でまだ暗い京都市街を彷徨する。彼はこうつぶやく。「京都に残った。残ったのがむしろ癪である。アメリカは文化の記念として京都や奈良に手をつけなかったのだ。つまり敵にそれだけの余裕があったわけで、その辺りが余計に癪にさわる。」明け方、腹が減った彼は持っていたパンを食べ始めるが、すり寄って来た物乞いの老婆の哀願に負けてなければしのパンをくれてやる。しかし、この老婆、パンを食い終わるや、やおら煙管を取り出して煙草を吸い始めたのだ。生きる執念のしたたかさを思い知らされ、呆気にとられて彼は苦笑する。

風太郎は兵庫の但馬の医者家に生まれた。幼い頃、医師の父親は死亡、母親は同じく医者の子の父の弟の叔父と再婚す

るが、その母親も彼が十五歳の時に死んでしまう。反抗期にあつてすべてがうとましくなった彼は、中学卒業と同時に家を飛び出し単身で上京する。昭和十七年三月のことである。幸い、戦時中の徴用制度の適用で沖電気に就職し、勤めながら医学校の受験を目指すことになる。昭和十七年といえば太平洋戦争の翌年であり、食糧統制で東京の物資不足が徐々に始まった頃である。それでも、当時はまだまだ何とかなつた時代で、この頃の彼は腹が空くままに食い物屋を漁り、どんぶり飯、寿司、汁粉、餡パンなどを食いまくっている。

しかし、戦局の悪化とともに次第にこれらの店は減少し、何時か食い溜めが効かない世の中になつていった。昭和十九年に入ると、米の配給と併せて麦、芋、大豆、コーリヤン、などの代用食が混ざるようになる。彼は外食食堂を梯子して一ヶ月分の外食券を十日で食い尽くしてしまうが、そのため、給料の殆どが補給のための食事に費やされ、気がつくとう受験期を前にして受験料が払えないまで

の事態になっていた。恥を忍んで郷里の叔父に臨時仕送りを頼むが、肝心の受験の方はことごとく落ちてしまう。

山田風太郎の「戦中派虫けら日記」「戦中派不戦日記」は、戦時中の彼が送った悲惨な耐乏生活、心の悩みなどを描いてはいるが、何処となく彼の達観した人柄、大らかさ、巧まざるユーモアなどが描写の客観性を支えている。彼の日記は、戦時中の東京を一人で生きる青年の赤裸々な生活、生の世情の記録として、資料的にも文学的にも貴重な存在となっている。

この頃の彼は栄養不良で身体はひよろひよろ、徴兵検査は肺浸潤ではねられる悲惨さだった。戦後間もなく、彼の持つ生来の文筆才能が開花、認められて医学生のまま作家に変身し、早々に飢えからの脱出に成功している。

当時の私は、東京都立の中学の二年を終え、転校の決まった京都三中の新学期に間に合わせるべく、家族に先行して二番目の姉と京都入りしていた。東京のわ

が家は三月十日の空襲では辛うじて罹災は免れたものの、最後と言われた五月二十五日の大空襲で全焼し、そのため、持病を悪化させた父は介護の母を伴って故郷の島根に帰り、京都に残された私と姉は一日二合三勺の配給米の耐乏生活を送らざるを得なかった。近所の家にならって住居前の道路の片隅に野菜の種をまき、紹介されて遠くまで芋掘りに出掛けるなど、いじらしい努力もしている。食い盛りの少年にとって結構深刻な飢えの時代の始まりであった。

一方の北は典型的な都会っ子で、東京で青山で脳病院を経営する恵まれた医者の家で育った。父は精神科医であり歌人でもある齊藤茂吉である。

昭和二十年一月には麻布中から松本高校に合格が決まっていたが、入学式が秋に延期となったため、彼はそのまま中学の勤労動員先の作業に従事することになった。五月二十五日の空襲で脳病院も自宅も消失したが、この時既に父茂吉も母親などは山形に疎開していたため、彼

一人が孤軍奮闘しながら消火活動に当たった。彼はこう記している。「今思い返せば地獄の体験だったが、その時は日常茶飯事に自分が遭遇したぐらいしか考えていなかった」。だから、彼の場合は風太郎に見られる生活感や切実感は全く伝わって来ない。こんな状況の中にあっても、彼は少年時代から集めていた昆虫採集の標本を持ち出せなかったことを後悔し、その後、彼は東京郊外の兄嫁筋の家で厄介になりながら、無邪気にも松高に入学するための白線の帽子や朴歯の手入れに精だししているのである。ところが、松本に移ってから彼の生活は一変する。

昭和二十年八月一日、彼は意気揚々と松本入りしたが、当初の期待は見事に裏切られ、学校側の簡単な挨拶の後、校舎とは縁のない大町の軍需工場に送られた。早速、飢えが始まった。工場で出される大豆入りの盛り切りの飯だけでは到底足らず、持参した炒った大豆と水で急速に空腹を満たしたために激しい腹痛に襲われて寮の一室で寝込む破目となる。

この間に広島に原爆が落とされて終戦となったが、彼にとつては「原子爆弾以上に空腹に悩まされた」期間であった。だから「マンボウ青春期」の最初のタイトルは「初めに空腹ありき」となっている。終戦直後、彼は、大町から松本には戻ったが、肝心の授業は教師も飢えていて休校ばかり、一旦九月二十日と決まった開校も食糧事情の見通しが立たず、寮運営が出来ないこともあって、授業開始は三月まで延期されることになった。当時の思い出として、畠からネギや柿をパクったり、道端で拾った進駐軍が捨てた煙草の吸い殻をまわしのみしたこと、飯盒一杯捕った小さなアマ蛙の肉をヒーターであぶり醬油をつけて食べたことなど、今となつては笑い話だが結構深刻な飢えのエピソードが語られている。

終戦を迎え授業が復活して二学期が始まった。敗戦による深刻な混乱が全国的に展開されていた。が、戦災を免れた京都の片隅にいる身にはそれほど深刻な現象としては伝わらなかった。但し、食糧

事情の方は、相変わらず深刻で、その例として、法を重んじて闇米使用を断乎拒否した大学教授の餓死が報じられたこともあった。

この時期一番きつかったのは学内の昼食時間で、腹が減って昼までもたず、他の仲間もやっていることをいいことに自分も大概二時間目に昼飯を済ませていた。それに、配給米や芋だけの貧弱な中味は他人に見られたくはないというつまらない見栄も働いていた。

翌年暮れに島根で療養中の父がなくなった。そのため一家の基盤が東京に移り始め、私一人が三中卒業まで京都で頑張ることになった。五年生になり、卒業後の進学は茨城県の水戸高校を選んだ。その理由は、まだ東京に落ち着く場所のない自分にとつては、全寮制の学校を選ぶ必要がある、関東の旧制高校の中で、唯一全寮制をとっていた水高が一番その条件に叶っていたためである。

昭和二十三年の四月に水戸高校に入学した。水戸市にある本校が空襲のため焼失している関係で、一、二年生の授業と

寮生活は水戸手前の友部駅にある海軍航空隊跡の広大な敷地内で行われていた。北杜夫が描く松高の寮生活の食糧事情もひどかったが、水高の場合も、当時より戦後三年も経過はしてはいたが五十歩百歩ではなかったかと思う。食事は盛り切りのコウリヤン混じりの飯、お代わりは可能だがまずくて二杯と飲めない味噌汁などが主体で、空腹に耐えかねて、われわれも人並みに時々近所の畑から芋などをパクったこともある。中には青大将を切り刻んで、かば焼き風に焼いて喰っている猛者連もいた。夜になると、寮の廊下を徘徊する「エッセン（食い物）ねえか、ラオヘン（煙草）ねえか」と声が聞こえたが、これも当時の風物詩で、みつともないと思つたことは一度もない。さて、学制改革により旧制高校の生活は一年で終了し、翌昭和二十四年からは東京の生活がはじまったが、私にとつてはこの辺りがようやく飢えから解放された時期ではなかったかと思う。

※水高同期に山崎晃一君がいる。彼は

京都三十三十七回生の二年先輩であり、本来は恐れ多くて「君」呼ばわりは出来ないのだが、同期のよしみで勘弁して頂く。海兵から復員して群馬県の親戚筋の世話になり、そこで勧められて水高を受験したそうである。長年にわたり水高校友会に貢献した活動家であり、また、同校の俳句、油絵、ゴルフ会などに所属する多才な趣味人でもある。

茫々六十六年前

——端郎先生の宿題——

三十九回 酒井 大蔵

旧木造本館の二階は、講堂になっていた、正面には京三中の校訓が大きく墨書されていた。音楽の時間に、階段をドタバタ踏みつけて入室すると、ミッキーマ

ウス先生は、必ず叱った。

「靴が鳴りました」と答え

たとき、先生は私のサイズ違いの編上げズック靴をマジくと見据えて、叱責を中断して下さった。

本館の西側に、同じく古びた平屋の生

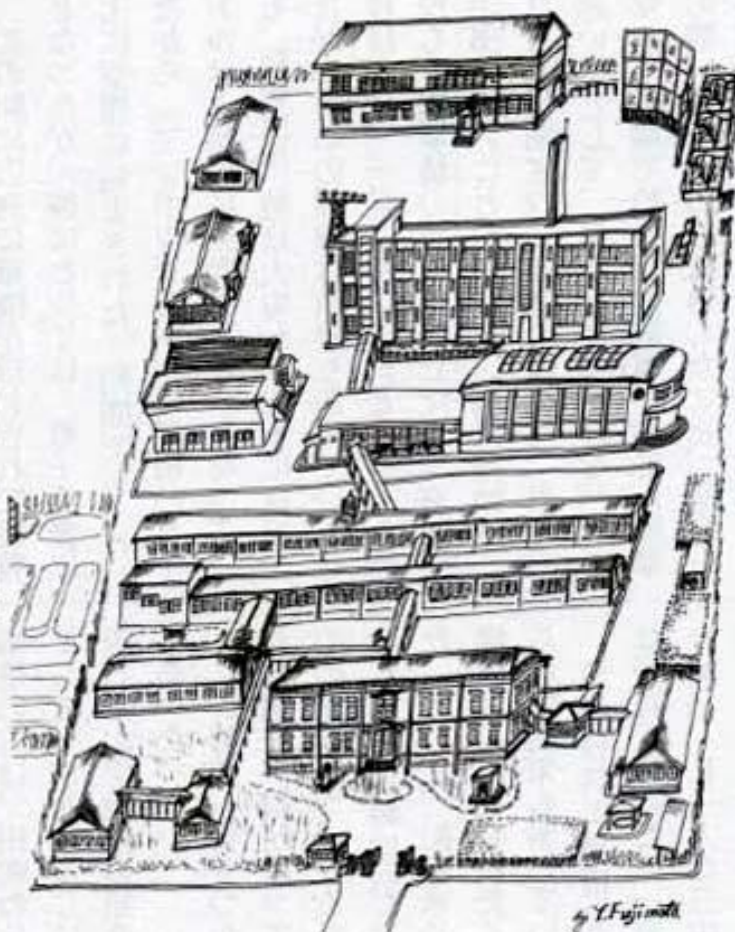
物学教室があった。二年生になったとき、カマキリこと鈴木先生が「今後は牧先生が講義して下さい」と予告された。何でも「蛇博士」の異称を持つ碩学ということで私は大いに期待して待った。

顎髯を垂らし、ネクタイの柄は、茶褐色の蛇の皮そのものであった。開口されるや「大学生が下宿させて呉れ、と依頼して来たので、一つだけ条件遵守を約束させた。果たせるかな、三月もすると学生は、その部屋に女を連れ込んだ。唯一の約束を違えたので即日、退去を命じた」と。

生物学の蘊奥が聴けると緊張していたのに、十二、三歳の生徒に何故こんな話をされるのかと訝った。女は、姉妹かも知れなかったし、勉強の話をしに来た知人だったかも知れないのに、私は失望し、疑問を遺した。

勤労動員が始まり、大学や専門学校で、一斉に講義対象を喪失した余波かと付度した。

学期末最後の生物の時間に、カマキリ先生は飄然と現れ「夏休みに宿題として、



昭和十六年頃の俯瞰図 作図：藤本泰雄（三中35回卒業）

植物採集をして提出せよ」と命じられた。その頃の私は、義兄が海軍のテスト・パイロットをしていた感化もあって、技術将校を志し、双胴の空母や飛行場不要の飛行艇の開発に傾注しつつあった。夏休みには、新設の陸軍飛行場のある田舎の叔母宅に寄宿し、銀シャリ享受を得ていた。水冷エンジンの「飛燕」が発着するのを望見するのも愉しみであった。離陸は、ほぼ順調だったが、着陸となると三機に一機位の割合で、滑走路上にぶつかって、黒煙に包まれて大破していた。後に知る「ソフト・ランディング」の難しさの目撃であった。

当時は「春日井飛行場と呼んだが、後の小牧（名古屋）空港である。飛燕は、映画で見たメッサーシュミット型の明らかな模造と視えた。発着ばかりを観ておれない。気の進まぬ生物の宿題が脳裡を圧迫している。そろそろ帰洛しなければならぬ。だが、花や草には興味がもてない。

ふと思いついて樹木の枝をいろいろ集めては、の着想が湧いた。庭木の梅や松、杉や檜等から始め、次々と追加して

百二十種程に達した。名称を知らぬ樹木もあり、一覧表に名称列記を果たすのに、辞書を調べたり、古老に問うたりしたもののである。

枝は、長さ十五程程に揃え、切り口を斜めに拡大し、縄梯子式に二本の棕櫚紐で結び連ねた。持ち帰るときは、それを捲き込むと容積を縮め得た。

その後の生物学教室は、休講つづきであった。或いはカマキリ先生も、半田動員先への支援で不在だったかも知れない。そこで、また大事件が起こった。「エッセン事件」であるが、それは二年二組（軍人組）の諸兄が記憶している筈（他の学年にも軍人組は編成されたのだろうか）島田配属将校との間でも一悶着があり、退学寸前の薄氷の上で通学を続けていた。

学年末、嫌な思い出続きの生物教室を訪れ、空室に別れを告げた。念のため、教官室に入ると誰もおられず、廊下を隔てる柱に、私の夏休みの「樹木標本」が縦に飾られていた。一言「これは学校で保存するから返却しない」と教官が告げて下されば、と思ったが、訴える先はな

かった。「ままよ、この標本が、私の京三中在学の証しになって呉れようか」と自らに納得させていた。そして、陸軍志望では無かったが、既に「余命なし」と三月末に幼年学校に私は転じた。

（戦後、あの標本がどうなったか、確かめる機会を得ぬまま経過した。あれは、私の「創意の萌芽」だったか。思い出の尽きない京三中は、今も懐かしい。

H 22・12・14 記

三中囲碁・将棋クラブのこと

三十九回 澤田 治雄

三中に囲碁・将棋部が存在していた事を知って居られる方は極く少ないと思う。終戦後、同好者が集まって宿直室で指した事は覚えていたが、何しろ六十五年も前の事なので記憶が薄らいでいて、何時まで続いたのかとか、メンバーの名前も殆ど覚えていない。指導にあたられる先生方も先輩も居られなかった事は確かである。部というより同好会であった

が、そんな状態の中で、今も鮮明に記憶に残り、大袈裟に言えば以後の人生に大きな影響を与えるような出来事があった。

一学年下のA君は主に碁を打っていたが、或る日「私の家の近くに将棋の強い人が居られるので、一度教えてもらいませんか」とすすめられ、西陣の元誓願寺通りにあるN氏宅へA君に伴われて、お邪魔した。N氏は奨励会でプロ棋士になる修業をされたという事である。座敷に通されると既に五寸盤と駒台が用意されていて、指導を受ける事になったが、手合割は六枚落ち、俗に云う金・銀であった。一局目は良い所なく敗れ、二局目も一手違いにもならず、三局目はどうにか勝つ事が出来たが、どうもゆるめてもらったらしい。以後N氏にお目にかかる事はなかったが、私の将棋の師匠として、一生忘れる事は出来なかった。

以後三中在学中や卒業後も、家庭や仕事の都合で熱心に将棋を勉強する機会は殆どなかった。

昭和三十八年の一月より約七ヶ月間軽い胸の病で、岩倉の洛陽病院に入院した

が、週に二回、ストレプトマイシンの注射を受けるぐらいで、退屈で仕方なかった。之を絶好の機会と将棋の勉強をする事にし、「将棋世界」誌を購入し、定跡や詰将棋を何回も読み返し、時々院内で実戦も行いながら、七ヶ月で相当実力が付いたと実感出来た。

昭和四十一年秋、京都新聞社が第一回将棋職団戦の開催を発表したのを受けて、五人一組のチームを結成して参加した。第一日目の予選リーグを危なげなく通過し、第二日目の決勝トーナメント第一戦を主催の京都新聞社チームと戦い勝利をおさめ、準々決勝で優勝チームである同志社大学OBチームに敗れた。私個人は、第一戦ではN二段、第二戦ではT二段に勝ち、五戦全勝の成績であった。翌四十二年の第二回の職団戦にも出場し、チームは三位入賞した。翌四十三年、チーム内の友人の薦めで初めて個人戦である京都王将戦に出場、四連勝で一日目を通過し、二日目も五回戦、準々決勝と勝ち抜き、準決勝でO三段と対戦、この棋譜は京都新聞の夕刊に掲載されたが、

観戦記にあるように、やや優勢であったのだが、一手疑問手があり、惜敗した。

しかし、初出場で五百余人の中でのベスト4は予想外の好成績だと思っている。因みに第一回京都王将戦の優勝者は私の師匠のN氏こと野口真一氏であり、弟子の私は第十一回の三位にとどまり、恩返しは出来なかった。

昭和四十五年の職団戦で、Y自動車チームの主将として、準優勝したのが、職団戦としては最高の成績であった。優勝したD印刷チームとは何回も対戦したが、四十二年の第二回と四十六年の第六回で私が対戦したのがD印刷の若きポイントゲッターであるO二段であった。二回とも私が勝ったのだが、その時のO君の口惜しそうな顔が今も目に浮かぶ。O君は私より十三才年下であるが、D印刷を定年で退職後、将棋の普及活動に力を入れられているらしい。最近インターネットでO君のホームページを見る機会があった。O君こと小野巖氏は、日本将棋連盟・京都府支部連合会の会長で、将棋五段、最近国内では数人しかいない「棋

道師範」に昇格されたとの事、そのホームページの中に「思い出の棋譜」というメニューがあり、その中に私との対局の棋譜が載っている。興味とヒマのある方は是非みて頂きたい。(http://www2.odn.ne.jp/iwao/)

尚、私に野口氏を紹介してくれたA君とは京都の囲碁界の強豪浅野満三氏で、最近もシニア囲碁まつりで優勝されたと京都新聞紙上で拝見した。

六十才でY自動車を定年退職した。最後の職団戦はベスト8どまりであったが、私は五戦全勝した。退職後はスポーツクラブで体を動かして、今までの運動不足で弱った足腰を鍛え直して健康に日常生活を送れるよう努力した。

六十七才の時に膀胱癌の手術をうけ、一時は死も覚悟したが、開き直って好きな事をして生活していると、自然と運が向こうからやってきて、四年前に現在の住所に新築移転する事が出来た。現在はPCで東大将棋やヤフーのモバゲーの将棋を楽しんでいる次第です。

閑人の問わすがたり その二

「減塩」

三十九回 徳永 良夫

食塩は、人間が生きて行く上で欠かせないミネラルであるが、一方で摂取量が多過ぎると、健康に悪影響を及ぼすことも知られている。一昨年の初め頃、新聞の特集欄に次ぎのような記事があった。

「石器時代の人は一日〇・五〜三グラムの食塩しかとっておらず、人体はこのレベルに適合しているという。上島教授（滋賀医大）によると、文明の発達とともに塩漬けの保存食を食べ始め、慣れてしまったそう。一九五〇年代の日本では、一日に二五グラム以上の食塩をとっていた地方もあったが、以降減っている。〇四年度の国民健康・栄養調査で、一人あたりの食塩摂取量は一一・二グラムだった。」

「日本人は、一日に一グラム前後の食塩を食べ物から取り込んでいるそう。一方、国の健康政策である（健康日本21）では、成人の一日あたりの平均食塩摂取

量の目標値を一〇グラム未満としている。

毎日のくらしい食塩をとっているのかを知るために、塩分摂取量の簡易測定器（減塩モニター）を利用する方法がある。就寝後から起床時までの尿をカップにとりセンサーを差し込むと、一五秒程で前日摂取した食塩の量が〇・一グラム単位で表示される。これまでは、病院などで二十四時間尿をためて測らなければならなかった。減塩モニターはそれに比べると誤差はあるものの、日々の増減をつかむには十分だし、自分で手軽に測れるのが利点という。」

この記事で特に私の目を惹いたのは、食塩摂取量を簡単に測ることの出来る器具が開発され、已に市販されていることであった。

我が家の食事は薄味の部類に入るが、だからと言って食塩摂取量が少ないとは限らない。私は大分以前に「痩せの大食い」状態から、主食を定量摂取に変更した。しかし、「おかず食い」状態は続いていた。従って、食塩摂取量が多いのではないかと懸念を抱いていたが、具体的

な数値が掴めない限り、手掛かり足掛かりの無い宇宙遊泳のようなもので、手の打ちようが無かった。そのような状況の下で、減塩モニタの入手には何の躊躇いも無かった。

食塩摂取量を測り始めたのは、二〇〇九年二月二十日である。その目的を整理すると、先ず塩分摂取量の実態を把握すること。次いで数値を基準内に抑え込むこと。更に塩分摂取量のコントロールを利用して、副食の過食習慣を是正することなどである。

一方この年で酔狂なことを目論んでも、何の役に立つものかと笑われそうだが、自分のやりたいことで楽しむのも悪くはない。測定の手順は至って単純なので、直ぐ生活の中に融け込んでしまった。データは一五回分まで記憶されるがそれ以前のもは消えるので、塩分量、塩分濃度、尿量に限って、表に転記し保存することにした。これまでに蓄積したデータ量は六百四十日分になる。

測定を始めた当初三〇日分のデータを見ると、食塩摂取量が一〇グラムを超

えているのが二五日、平均一一・〇グラム（最高一六・二、最低九・三）であった。これでようやく足掛かりが出来、暗中模索状態から抜け出せることとなった。

一年後の二月二十日から三十日分のデータは、食塩摂取量一〇グラム超が二日のみ、平均八・六グラム（最高一一・四、最低六・五）という結果になった。一年前に比べ、平均値で二・四グラム下がっている。

この間、減塩を目標に先ず始めたのは、主な料理について食材と調味料の量を記録することであった。回を重ねるに従って適量が絞り込まれ、我が家のレシピに仕上がる。これはその後の調理に役立つ資料となった。

次に圧力鍋とオープン鍋を新調した。（従来のものはレシピが無かったり、表面加工がしてなかったりで使い勝手が悪かった。で、燗製用などに廻す事とした）圧力鍋は調理時間の短縮は勿論のこと、調味料を食材に浸透させる働きがあった。食材を薄味に味良く調理するのに力を発揮している。

副食の過食習慣は、毎日のデータをチェックしているうちに何時の間にか解消してしまった。従来と変わった点は、食事の際、取皿に取る副食の量を意識して減らした。更に食事の終盤、大皿に僅かに残った料理を始末する役割から降りることになった。結果として冷蔵庫の中は少しずつの残り物で溢れることもあるが、最終的には無駄にならない。

昨年、食塩摂取量の基準値が変更された。五年ぶりだそうで、男性の場合一〇グラム未満だったのが九グラム未満へ、女性は八グラム未満から七・五グラム未満に改められた。これらは、実績を見ながら達成可能と思われる数値を選ぶものらしい。女性の場合数値が低いのは、多分食事が少ないことによるものと思われる。

ところで、食塩摂取量の世界基準は五グラム未満ということになっていて、日本の場合にはあまりにも開きが大きい。この原因は食事の種類と喫食様式の違いによるものと推測される。私の経験では、一九九二年の事になるが、ノルウェーのオスロで知人宅に泊めて貰った時の食事

が、余りにも薄味で驚いたことがある。子供のうちから薄味に慣れて育てば、大人になっても塩を多く欲しがらないと言われているが、日本人の食生活のパターンが現在のまま続く限り、減塩を進めて行くにはかなりの困難が予想される。現に私の場合、塩分を摂り過ぎないように注意して生活していても、昨年十一月から十二月にかけての食塩摂取量平均は8.4グラム(最高12.4、最低5.7)である。学校給食で育った若い世代の食塩摂取量は、今後どのような経過を辿るのか注目したい。

閑人の問わず語りその三

「柔道雑感、渾身の一本」

三十九回 徳永 良夫

今年二月十一日の朝日新聞に、柔道の練習に起因する事故発生状況についての記載があったから、ご覧になった方もあらうと思う。私は小さい頃から柔道とは関わりがあった方なので、異常な事態に衝撃を受けた。

記事を要約すると次の通りになる。

「柔道の練習中に命を落としたり、重大な障害を負ったりする子供が後を絶たない。中学・高校の授業や部活動に限っても、近年は年平均四人が死亡しているというデータもある。柔道や剣道が全国の中学校で必修化される二〇一二年度を目前に、子どもの命を守る早急な取り組みが求められている。

(事例) 高校一年生(一九才)が、課外活動の昇段試験後に急性硬膜下血腫の爲意識不明に陥った。

大阪の民間の柔道教室で、小学校一年生の男児(六才)がまだ受け身も十分に出来ないのに、繰り返し投げられた後死亡した。

愛知教育大の内田講師のまとめでは、一九八三年度以降、学校の授業や部活動での柔道事故は、死亡が一一〇件(年平均四件)、後遺症の残るものが二六一件(年平均一〇件)にのぼる。一九九九、二〇〇八年度の間に発生した事故志望者数は、一〇万人当たり、高校でラグビー三、六二人、柔道二、八一人、剣道一、〇一

人、中学校では柔道一、八八人、バスケットボール〇、二九人と、何れも柔道が上位を占めている。

また、一九八三〜二〇〇九年度で柔道の学年別死亡事故の割合は、中学一年生五四、一%、高校一年生六四、四%と、何れも一年生が半数を超えている。内田講師は、(入学直後で技術的に未熟な段階での事故が多いのではないかと。指導者はもちろん、学校全体で安全への意識を高めるべきだ)と話す。

ここで自らの柔道の歴史を振り返ってみると、これからという時期に戦争、敗戦の波に翻弄され、先細り、中断の憂き目に遭ったままに終わった事が残念でならない。

柔道を習い始めた年齢は定かではないが、まだ小学校へ行く前だった。その頃、千本今出川を少し下がり東へ入った所に柔道を教える道場があり、週に一、二度父親に連れられて紫野の自宅から通った。背丈に合わせた小さな柔道着を身につけての稽古は楽しかった。

道場で最初に習うのは受け身で、何度も繰り返し稽古させられた。柔道の基

本は受け身に始まると言っても過言ではない。投げを打たれても倒されても、受け身が危険から身を守ってくれるから疎かには出来ない。受け身は、後へ倒れた

り前に転んだりした時に、腕で畳を強く叩いて身体（特に頭）が受けるダメージを防いだり軽減したりする方法で、柔道を習得する為には欠かせない基礎技術である。動作は至って単純であるが、やってみると結構面白い。特に、勢いよく走って前転し受け身をする、一回転してパツと立つことが出来るので、家でも暇さえあれば繰り返して楽しんでた。当時は受け身ができるようになるまで投を教えて貰えなかった。これは当然であって、受け身が出来ない生徒に投げを掛けた場合、相手がうまく対応出来なければ事故に繋がる可能性がある。

先に新聞で取り上げられた二件の柔道事故に就いて考えると、高校一年生の場合には明らかに頭を強打している。ただ、昇段試験を受けた以外の詳細が不明で、原因を推量するのは難しい。本人が、将来教職に就き柔道の顧問になる夢を抱い

ていたのに残念である。事故を防ぐ配慮は為されていたのであろうか。

小学校一年生の死亡事故は全く痛ましい限りだ。受け身がまだ十分に出来ないレベルの男児を繰り返し投げたことは、指導者にあるまじき行為で許し難く、殺人者と言われても致し方無い。生徒の体調、技術レベルに応じて手加減する心遣いが無ければ、指導者として失格である。この件については、警察が指導者ら二人を業務上過失致死の疑いで書類送検したようであるが、そんな程度の事で済ませて良いのか腹立たしい限りである。

更に中学、高校共に死亡事故が一年生に集中しているのは、初心者に対する指導に問題があるのではないだろうか。生徒の技術習熟度合いを吟味せずに、万形式主義で性急に流れ、安全意識が欠けている為と思われる。

さて話を元に戻すと、小学校に行くようになって、どのような事情があったのか道場へは通わなくなつた。しかし稽古をやめたわけではない。夜になると、自宅の二階の部屋で父親を相手に稽古を続けた。

小学校を卒業すると、私は前にも触れたように九州の田舎へ飛び出してしまい、百姓仕事を手伝いながら高等小学校へ通う事になる。九州と言っても福岡県の八女地方であるが、剣道の盛んな所で、学校でも週に一回はクラス全員が面、胴、籠手などの防具を着け、二人ずつ組んで撃ち合う授業があつた。テレビの龍馬伝でやってた千葉道場の稽古風景を思い浮かべて貰うと良い。柔道は出来なかったが、この一年で剣道の腕は随分上達した。

ところがその翌年、クラス担任の強い奨めで、福岡県立八女中学校へ進む事になった。それまで中学への進学を全く考えていなかった私にとって、人生の大きな転機であつた。しかも再び柔道との出会いが待っていた。

中学の武道は剣道と柔道の何れかを選択することになっていて、私は柔道を選び併せて柔道部にも入ることにした。次に述べるのは入部直後の出来事で、実に六十八年もの間胸に秘めたまま持ち越して来た内容である。

今年四月一日に東京の椿山荘で、八女

中同期生の「みんなで傘寿を祝う会」という集まりがあった。その席上、今まで人に知られていない秘話が次々に発表され、私もそれに従って即興で次のような話をした。

柔道部では四月の最初の練習日に、新入生と上級生との顔合わせの行事がある。顔合わせは柔道場の板壁を背に、黒帯が散見される五年生を上座に一年生までが居並ぶ中で、四年生が一年生を相手に夫々交替しながら手合わせをするという趣向が用意されていた。

四年生と一年生とは、体格の面で歴然とした差がある。更に四年生は三年もの間修練を重ねて来ているから、技倆に差があることもはっきりしている。一年生は一人ずつ道場の中央に進み出て相手をして貰い、簡単に転がされては席へ戻る繰り返しであった。

私の順番が廻って来たので立ち上がった前に進み、一礼して相手を見ると私に比べてかなりの身長差がある。これだけの差があれば尻込みするのが通例かも知れないが、私は全く気怖じする事が無

かった。しかし、組んでみると襟首を掴んだのでは脇が開いて力が入らない。止むを得ず前襟と袖を軽く握り、相手の動きに合わせて動いた。但しそのままでは技を掛けられて負けることになる。機を見て先手を打つ必要がある。取り組んで十秒程経った頃、その時がやって来た。私は両手にしっかりと力を入れ、一歩下がって相手を強く引いた。相手の反応次第で次の打つ手が決まる。急に引かれたものだから、相手は慌てて身体を起し私を引き戻そうとした。その瞬間、私は相手に身を寄せ、右足を内側から相手の左足に食い込ませて後へ跳ね上げ、曲げていた両腕を伸ばして力の限り相手の胸を突いた。次の瞬間、相手の身体は支えるものを失って宙に浮き背中から落ちた。

さつと審判(柔道教師)の右手が挙がって「一本ノ」という声が響いた。

お互い一礼して席に戻ったが、相手をしてくれた四年生の胸中はどうなものであっただろうか。何しろ柔道部の部長以下全員が居並ぶ目の前で、事もあるうに

今日入ったばかりの一年生の一番小さいのに、三年間修練を続けて来た大の男が完敗で一本取られたのである。本来なら起きる筈も無い事が起きてしまった。私の方では、あれで良かったのだろうかという悩みがずっと続いた。相撲界の八百長問題が盛んに取り沙汰されるようになった昨今、一生懸命にやったのだからあれで良かったのだと、ようやく納得できようになった。

さて、柔道をやって来て培ったものは何かと考えてみると、度胸ではないかと思う。事に臨んでも、余り怖いと思う事が無い。田舎で高等小学校一年生として登校した時、待ち受けていたのは「いじめ」であった。私は「都会人」と呼ばれ、格好の標的と目されていた。しかし、いじめられる事はなかった。級長をはじめ、いじめようとする者を機先を制してやつつけたから、誰も手出しをしなくなった。松延(五木)寛之は戦後平壤から引き揚げ、近くに住んでいて八女中学に通っていた。彼の弟は隣村に住んでいたと思われるが、彼の著作によると、弟

が「引揚者」という罵声を浴びせられながら、大勢に石を投げられて追われた悲しい出来事があったらしい。この例でも分かるように、当時小学校では島国根性に凝り固まった者が多く、他の地域からの転入者、さらには成績が自分達より優れている者を目の敵にし、痛めつけることに依って自分達の優位性を示そうとした。また付和雷同傾向が強く、一寸したきっかけで集団暴力化する恐れがあった。私の場合は、一つ一つの芽をその都度徹底的に潰すことで乗り越えた。先日の椿山荘の席で、私は友人の一人から次のような話を聞いた。

「八女中学に入って間もない頃のある日、一年生から三年生までの五、六人が自転車で通学の途上にあった。途中、皆が避けて通りたい集落が橋の手前にある。集落に差し掛かった時、突然横合いから五、六人の小学生が出てきて道を塞ぎ立ちどまった。皆自転車を降りて顔を見合わせたが、三年生も手出しが出来ない。方向を変えて遠回りすると遅刻してしまうと思っていた矢先、徳永君が自

転車を停めて彼等の群れに近寄ったかと思つと、殴り掛かつて追い払つてしまった。その剛胆ぶりには皆驚いた。」

このような出来事について当人の私は全く記憶がなく、新鮮な気持ちで聞かせて貰った。記憶に残っていない所をみると、一つや二つ位はなぐつたのかも知れないが、相手が私の顔を見てびくくりして逃げたのだらう。隣村から通う中学生を襲う心算だったのが、私がその中に居たので失敗したものと推測する。

柔道の稽古は積んで来たが、これを実地に使う事は滅多にない。小学校の時に一回、大学を卒業して暫くした時に一回、合計二回である。二回目の時は、西大路通の東寺の電停の近くで酔っぱらいに絡まれ、背広の肩の辺りを掴まれた。余りの馬鹿力に、そのままでは背広が破られると思つたので投げ飛ばしたら、途端に大人しくなり横になってしまった。

私がこの年になつても尚機敏性に富んでいるのは、柔道の影響が大きいと思われる。相手の力を利用して技を掛ける修練を続けるうちに、自然と身に備わった

のだらう。

最後に一つ。今でも柔道がやれるかと聞かれたら、出来ると思いたい。そのような心境である。

つもりちがい十ヶ条

- 一、高いつもりで低いのは教養
- 二、低いつもりで高いのは気位
- 三、深いつもりで浅いのは知識
- 四、浅いつもりで深いのは軟の皮
- 五、厚いつもりで薄いのは人情
- 六、薄いつもりで厚いのは面の皮
- 七、強いつもりで弱いのは根性
- 八、弱いつもりで強いのは我
- 九、多いつもりで少ないのは分別
- 十、少ないつもりで多いのは無駄口

空の散歩

4回 吉田 和夫



インターナショナル・エアライン・パイロットのいわゆる5つの魅力の一つは、遠い世界に何度も直接触れることができた喜びと共に、その頃の記憶が絵のような鮮やかさで蘇ってくることである。飛んだ路線の航路事情とさまざまな国の生活文化や風俗習慣などを、その折々に見たまま感じたままを記録し、帰国後参考文献などで補足してみた。

読者諸氏も筆者と共に旅するつもりで楽しんでもらえれば、この稿をおこした意義は無駄ではなかったことになる。

元・日本航空(株) 機長

インターナショナル・エアライン・パイロットの魅力

砂漠の上を飛ぶ DC-8



パイロット・ライフという言葉は退職後15年経た今日でさえ色褪せることはなく、新鮮な響きをもって筆者を若返らせ、ロマンの世界へ誘ってくれる。

普通の人々が経験出来ないような多くの国々や世界の人達を、この目で見る機会に恵まれたこと。更にいえば、乗員(運航)の出会いだけでもフライト毎にメンバーは変わり、大仰(オオギョウ)に言えば生死を共にした一期一会の仲間達に会ったことであろうか。



飛行機が好きな者同士の連帯感と責任感を共有していることや、国内、国外を問わず、同じ釜の飯を食った間柄であることで、街で出会っても直ぐ飛行機の話に花が咲く。

かつて飛んだ飛行の辛い苦い経験や、失敗や成功を共有しているからだろう。

シドニー湾

第2は、地上高く飛翔したとき眼下に広がる一大絵巻で、同じ鳥瞰図でも季節や昼夜の違いで様々な景観を見せてくれ、感動させてくれる。

左の写真は東京より夜を徹して飛び、早朝、シドニー湾上空を空港に向け降下中に非番のパイロットがジャンボ機操縦室から撮影したもので左手にハーバーブリッジ、その少し上にオペラハウスが夏雲の間から見える。その右側に市街中心地のビル群やシドニー市街が上に向かって広がっている。



上の写真は真冬、きらめく満天の星空の下、中近東の砂漠上空を飛行しているとき、悲しげに灯る小さな集落を見て、そこで細々と暮らす人達を想像したり、日中はその佇(たたず)まいさえ見分けがたく、荒涼とした死の砂漠に変貌させて慌(アワ)てさせたりする。



第3は遠い世界に筆者が直接触れることで、様々な生活文化や、風俗習慣を知って見識が深まったこと。

第4は離陸後のはりつめた緊張感から解放され、雲や霧を突き抜けた後、燦々（サンサン）と輝く太陽を目にしたときの爽快感。

第5は計画通りの降下進入が出来、正規の着陸ゾーンに、正確な速度で、スムーズに、接地した時の満足感。



或るベテラン機長は、そういう時は滑走路が動かず、あたかも静止しているように見える時だと感想をもら

したことがある。
1年に1回あるかどうかの着陸感である。

74年10月の或る日、福岡東京便（ジャンボ機）で羽田空港に着陸後、乗客の1人が筆者に手渡すようスチュアデスに依頼したメモ書きが今手元にある。その乗客は、「水色のワルツ」を作曲した著名な作曲家、高木東六氏であり、彼自身の手書きの跡があった。（06年9月死去）

機長様

素晴らしい着地テクニク、
驚嘆いたしました。

最近こんなステキな
快適な着地感は味わったことがありません。

益々ご健闘と御精進を祈りつつ

右、お礼まで。

高木 東六（作曲家）

この時が1年に1回あるかどうかの着陸であったかもしれない。こういう乗客はあとにもさきにもなかった。

最後はメリ・ハリのある生活習慣が身

についたことであろうか。それぞれ目的を持った多くの乗客を安全に目的地に運んだ後の飛行の達成感。

精神の緊張と弛緩（シカン）の短い（4、5日〜7日）飛行サイクルは、生活感覚をいつも新鮮なものにして仕事に倦（ウ）むということはない。

◆東南アジア路線

味覚の街、ホンコン

東南アジア路線 東京〜高雄（台湾）〜
ホンコンを結ぶこの路線は夏秋の台風と冬の晴天乱流に悩まされた。台風による擾乱（ジョウラン）を避けるためコースを変更したり、台風の目の上を飛んだりした。そこは意外に静穏であった。しかし突然襲う晴天乱流は冬季高層等圧線の配置の影響でジェット気流が収斂（シュウレン）する鹿児島方面上空で不思議によく発生した。

1〜3月のホンコンはこの地域特有の悪天候（一名 クラチン）により全天低い雲に覆われ、視界不良のため着陸がで



きないことがよくあった。昔のホンコン・カクタター島上空を通過してホンコン国際空港に着陸した。地上係員に飛行経過を報告したあとホテルへ行く途上、空港周辺の一郭に目を覆いたくなるような暗灰色のスラム街が往来に面して広がっているのが目に入った。地元っ子はそれを九龍城と呼んでいた。

所謂、無頼（ブライ）の徒の巢窟（ソウクツ）で一般人が路地に迷い込むと生命の保証はないというほどの無法地帯であったという。その前を過ぎるとやがて街路の両側に瀟洒（シヨウシャ）なホテルや店舗が並ぶ九龍地区の中心街にでる。徹夜飛行の疲れを九龍公園傍のホテルでとった後、誰言うもなく夕方5時ごろに近くの九龍飯店に集まり、機長を中心に同乗クルー（副操縦士、航空士、航空機関士、客室乗務員）一堂がひとつのテーブルを囲んだものである。各人は無事飛行を終えた達成感に口元がゆるみ、ラオチュウの美酒にほんのり酔ううちに談論風発、時の過ぎ行くのを忘れさせ

第1次、2次のアヘン戦争で中国への野心を剥（ム）き出しにした英国は、1860年敗れた中国と北京条約を結んで九龍地区とストンカッター島を手に入

きないことがよくあった。昔のホンコン・カクタター島上空を通過してホンコン国際空港に着陸した。地上係員に飛行経過を報告したあとホテルへ行く途上、空港周辺の一郭に目を覆いたくなるような暗灰色のスラム街が往来に面して広がっているのが目に入った。地元っ子はそれを九龍城と呼んでいた。

所謂、無頼（ブライ）の徒の巢窟（ソウクツ）で一般人が路地に迷い込むと生命の保証はないというほどの無法地帯であったという。その前を過ぎるとやがて街路の両側に瀟洒（シヨウシャ）なホテルや店舗が並ぶ九龍地区の中心街にでる。徹夜飛行の疲れを九龍公園傍のホテルでとった後、誰言うもなく夕方5時ごろに近くの九龍飯店に集まり、機長を中心に同乗クルー（副操縦士、航空士、航空機関士、客室乗務員）一堂がひとつのテーブルを囲んだものである。各人は無事飛行を終えた達成感に口元がゆるみ、ラオチュウの美酒にほんのり酔ううちに談論風発、時の過ぎ行くのを忘れさせ

●ホンコンの街

れた。更に1898年、防衛上の不安を名目に235のホンコン島を含む周辺諸島を99年間の期限付きで租借した。その後、1941年太平洋戦争勃発と同時に日本軍がホンコンに侵攻、12月25日に占領した。この時から敗戦までの3年8か月の占領期間を除いて再びホンコンは英国の支配下に服した。

一時60万人まで激減した人口は、1949年中華人民共和国が成立すると大量の難民が中国内陸からホンコンに流入し、人口は230万人を超える勢いで激増した。更に1970年以降中国やベトナムから毎年不法入国があり、今（2007年）や総人口は590万人までに膨（フク）れ上がっている。

しかし、話は前後するが筆者がホンコンへ飛び始めた1958年の頃は街の中心であるネインド道を歩いても日本人観光客を殆ど見かけなかったように、土地っ子も比較的になかったようである。

DC6Bプロペラ機 羽田23時59分発
のホンコン便（DC6Bプロペラ機）は

8時間30分の飛行後、翌朝8時半頃ストンカッター島上空を通過してホンコン国際空港に着陸した。地上係員に飛行経過を報告したあとホテルへ行く途上、空港周辺の一郭に目を覆いたくなるような暗灰色のスラム街が往来に面して広がっているのが目に入った。地元っ子はそれを九龍城と呼んでいた。

所謂、無頼（ブライ）の徒の巢窟（ソウクツ）で一般人が路地に迷い込むと生命の保証はないというほどの無法地帯であったという。その前を過ぎるとやがて街路の両側に瀟洒（シヨウシャ）なホテルや店舗が並ぶ九龍地区の中心街にでる。徹夜飛行の疲れを九龍公園傍のホテルでとった後、誰言うもなく夕方5時ごろに近くの九龍飯店に集まり、機長を中心に同乗クルー（副操縦士、航空士、航空機関士、客室乗務員）一堂がひとつのテーブルを囲んだものである。各人は無事飛行を終えた達成感に口元がゆるみ、ラオチュウの美酒にほんのり酔ううちに談論風発、時の過ぎ行くのを忘れさせ

るほど楽しいひとときを過ごした。

着物・うちわサービス

中華料理

ある時筆者の真向

かいの席から、「今日の機長の名は「紙」、皆様のお供をするスチュワデスは「山羊（ヤギ）」と申します。」なんてアナウンスしたらお客様はドットお笑いになり、きつとうけるでしようね」とぼつと頬を染めた目元の涼しい「八木」という姓の女性がうつむきかげんに言った。しかし「紙」という機長はいなかったように思う。今こそ中華料理



店は何処にでもあり、一般化しているが、この飯店の提供した料理とサービスは一醉千愁を解く趣があった。

スターフェリー

時間に少し余裕がある時はチムシャツイ波止場まで歩き、対岸のホンコン島のチュンワンまでスターフェリーによく乗った。船は二層式で上層が一等、下層が二等席で乗下船ゲートはそれぞれ違っていた。一般に上層は外国人観光客、下層はホンコンっ子が殆んどである。デッキに立つと爽やかな潮風が頬を撫でるのが心地よい。現在は海底に地下道と地下鉄が走っており、便利にはなっているが、情趣に富むスターフェリーは今なお健在である。



チムシャツイ 筆者に苦い経験がある。ある日、日中、デパート前を歩いていると、目の前に突然若い二人の男が立ちほだかり、ひるんだ隙に一人の男が筆者のズボンのポケットから財布を掏るや後方の男に手渡した。三人組は脱兎のような勢いで人込みをかき分け一目散に逃げていった。7〜80年代のホンコンは失業者らしい若者が街のあちこちにたむろしていて、人の意表をついた巧妙なスリ集団が跋扈していたらしい。

◆東南アジア路線

灼熱の王国 タイ・バンコク

東南アジア路線

1960年代のDC6B全盛時代、ホンコン空港を離陸後南支那海を南下、西沙群島ノース・リーフの直上を通過すると進路を西にとり、ベトナム領ダナンにむかった。ダナンからラオスのアンナン山脈を横切り、母なるメコン川を眼下に見てタイ領ウボンにむかう。ウボン上空から西南西方向



に位置する
バンコク・
ドンムアン
国際空港へ
は後一飛び
である。

南支那海

上空は一般に天気は安定し、気流は穏やかである。白波が洗うノース・リーフは進路をかえる恰好な海上物標であった。ダナンからウボンに至るベトナム、ラオス、タイ上空は夏場10000メートルを超す暗灰色の積乱雲発生地域で、時折強烈な衝撃に見舞われた。

しかし、ウボンを過ぎやがて降下に入るころ、下方に白い雲が散り、緑の田園や綿雲を写した灌漑用水が陽に照り映えていた。高度をどんどん下げると通か彼方に空港が見えてきた。約5時間の飛行後、13時頃着陸した。

◎バンコクの街

機外に出るやサウナ風呂に入ったような異様な熱気に包まれた。早速地上係員

に、運航状況の報告と航路上の雷雲発生地域を記入した気象現況図を手渡したあと、ドブ川沿いの悪路を1時間余走った。道路沿いには人家は少なく、時折車の窓越しから日焼けして半裸に近い土地つ子が川にもぐり、小魚らしいものを取っているのを目にした。ようやく瀟洒なホテルに着いた。白い外壁に蔦の葉を絡ませた小さな館である。フマキラーの匂いのする涼しい小部屋に案内されると、白壁の片隅に小さなやもりが怯えたようにへばりついていて、しばらくすると真つ白い制服の50年代のウェイターが、丁寧に「サワデイ」（今日は）とソーダー水を運んできた。お礼に小額のチップを手渡すと「コックン」（ありがとう）と軽く頭を下げ、仏様を拝むように両手を合わせてうけとった。



殆ど風を感じさせない街を、伝統の民族舞踊を見ようと独り出かけた。
舗装された道のあちこちに渋柿色の袈

袈を羽織った若い修行僧が、民家を托鉢しているのが目にとまったが、小乗仏教国らしくいずれも彼らを快く受け入れている主婦の柔和な笑顔が印象的であった。

成人男性は、生涯に一度は出家して少なくとも3か月は功德をつむのが慣習となっており、その他に2年間の徴兵義務を負っているとか。

説教中のタイのお坊さん

タイの伝統舞踊

劇場に入るとショウの始まるまえであつたのか、立憲君主国らしく観客全員が起立して国歌斉唱が始まった。慣習とは言え少し戸惑ったが起立しないわけにはいかなかった。規律に従わないと不敬罪で逮捕されることもあるといふ。

やがて舞台の前の方で単純な笛や太鼓のタイ伝統の楽器の演奏が始まると、舞台の袖から彩り豊



かな民族衣装を着た踊り子たちがリズムにあわせて腰を振り、手をしなやかにくねらせて出てきた。笑うと頬が光るような愛嬌一杯の表情が館内をなごませた。

19世紀末期 欧米列強の干渉から逃れ、植民地化されずに現在にいたるタイ王国は明るい国民性と仏教国らしい、人に優しい民族のように思えてならなかった。

タイ伝統楽器の演奏



赤道直下の国シンガポール

◎シンガポールの街

北緯約1度にあるシンガポールは、人口366万人のシンガポール島と54の島々で構成された共和国であるが、太平洋戦争中の1942年（昭和17年）日本が英国と激戦の末占領したシンガポールは、かつて英軍から「マレーの虎」と恐れられた山下奉文南方方面軍司令

官が、ブキテマ高地「現、トヨタ自動車工場」で英軍最高指揮官バーシバルとの間で交わされた「イエスカノー」かの直談判のあと、降伏に踏み切らせたシンガポール要塞であり、敗戦まで我が領土として、「昭南島」と呼ばれた島である。

筆者は1958年5月、シンガポール路線開設後、初めて足を踏み入れた。

赤道直下とはいえ海風がよく渡ってくるのか、肌に心地よく、初夏の強い陽光が河面に輝くジョホールバル水道

http://www.geocities.jp/yamashirokou_dousoukai/yama8/yoshida/13butou.jpg

（北コタバル方面から南下した日本軍は僅か2キロの水道を全軍が渡河するのに



7〜8時間を要した）や、ブキテマ高地の激戦地の跡を駐在員の案内で見て回ったことがある。6000人に及ぶ抗日義勇軍（在留中国人）が日本軍に肅清された悲しい話（現在でも威圧的な日本人を影で・憲兵・・憲兵・と土地の人はいう）や、炸裂した砲弾の跡や砲台の残骸などが時間の経過で風化したのか、何一つ当時の痕跡らしきものは残されていなかった。

その後度々訪れることがあった。市街に入ると整然とした街の佇まいや、濃い緑の公園のなかにハイビスカスの紅色、黄色の花が花園のように乱れ咲いている。

ビルの林立するオーチャード通りを歩くと、赤紫色や淡黄色の蘭の切花を売る店や色鮮やかな民族衣装を商う店、ビルの中ではヨーロッパから直輸入された高価な宝石、時計、高級クリスタルガラスなどを扱う高級店が軒をつらねている。英語で商談をまとめているのは殆どが華僑である。

街中を走るタクシーも騒音、渋滞を避ける目的で台数を制限管理されていると聞いた。一名ファインシティー（罰金の街）と呼ばれるほど厳格な規律と罰金制度を浸透させたお国柄とか。



カトン地区にあった
Saigonホテルの中
庭（クルーの定宿）

外国人（特に日本人？）には先の戦争への怨念が残っているのかホスピタリティ（外国人歓待）を感じさせない。しかし1981年、アジア最大規模のチャンギー国際空港（元、刑務所の跡地）が開港されて以来、2007年のエアライン満足度テスト（空港のラウンジ、空港サービス、機内座席、機内安全、機内エンターテインメント、機内食、客室乗務員の接客態度など）では480以上のエアラインと525の空港の中から五つ星を獲得したのはシンガポール航空などの4社だけである。

太平洋航路

東京サンフランシスコは、1954年2月、JALのDC6Bプロペラ機により開始された。乗客は僅か21名、31時間もかかったのは今から50年以上前のことである。

その後機種もDC7C、DC8、B747ジャンボ機と高速大型機へとめまぐるしくかわったように航法（ナビゲーション）も進歩し、ジャンボ機就航と同時に搭乗員「機長、副操縦士、航空士（ナビゲーター）、航空機関士」のなかから最初に航空士は姿を消した。それは慣性航法や天体航法の開発進歩によって彼らを不要としたからである。

一方、機内の快適性はジェット気流の流れ方に大きく左右された。冬季東行便は、時に高高度を西から東へ吹く秒速100メートル（時速360キロ）にも達するジェット気流を追い風として利用し、飛行時間の短縮や燃料節約に挑戦した。しかし生憎ジェット気流に隣接する空域は空気が乱れ、長時間機内は、車で

小石の上を走るような不快感が続くことが多かった。

◎「ウエーキ島」の残照・南十字星

東京から南東約3200キロ、ホノルルより西方3700キロの南海の孤島ウエーキはウイルクス、ピールの3島からなり、戦前アメリカではすでにパン・アメリカン航空が、クリップパー飛行艇を使って本土からハワイ、ミッドウェイ、ウエーキ島から米領ガム島を経由、フィリピンのマニラに至る太平洋横断の定期航空路を開発していた。（日本民間航空史話）太平洋戦争が始まってからは米海軍航空隊の戦路上の拠点として



基地が作られた。1941年12月に激戦の末、日本軍が上陸、占領して一度は大鳥島と名付けたが、やがて戦争末期に米軍に奪還さ

れた歴史がある。

筆者が航空士として飛び始めた1958年頃、飛行距離の短いDC6Bではホノルルまで直行できず燃料補給のため止むなくこの島に寄港した。東京からほぼ7時間飛行した搭乗員はここで降機し、先便で在島中の搭乗員がホノルルまで約8時間の飛行をしたのである。

従ってこの島には米軍、航空管制官、気象技術者を含む政府関係職員の250人ほどが常駐しているだけで、まさに米海軍航空隊、パン・アメリカン航空のための島であった。

ウエーキ島

戦後10年、戦争の傷痕を伝えるものとして、草むらに放置されたままの錆ついた野砲や岩礁に乗り上げた輸送船「諏訪丸」が無残に朽ち果て、暗灰色の船橋の一部を海面に突き出しているのを眼前にして敗戦の冷厳なる事実を思い知らされた。

1958年9月12日、日米安保条約改定に同意、藤山、ダレスの共同声明に

調印した岸内閣の外相藤山愛一郎（元、日本航空初代会長）が、米国からの帰途この島に立ち寄った。たまたま在島していた筆者は、銀髪を風になびかせ、日焼けした顔を真っ白いハンカチで拭いつつ、タラップから降りてくる雄姿を見かけたことがある。

この孤島では、女人禁制（スチュワードスは風紀上の理由で降機しなかった）によるものか女性を見かけたことはなく、生活文化の匂いは殆ど感じられなかった。

次便が来るまでの3〜4日間（週2〜3便）、時々同僚と海に潜り、サザエやウニなどの魚介類をとって無聊を慰めていた。しかしながらこの孤島には、給油のほかには航法援助施設として*ロラン局が設置されていて、日本ハワイ間の広い範囲に電波を出していたので、1970年頃までは船舶や航空機の位置決定になくてはならない島でもあった。

夏の日没直後浜辺に佇むと、果てしなく広がる大海原の上に南十字星が青い光

を放ち、潮の香と共に渡ってくる涼風が筆者の心を癒してくれた。

南十字星

*慣性航法

航空機に、重力の方向に対し常に平衡状態を保つジャイロを使った水平安定板を設け、ここに高感度の加速度計を置き、加速度を検出し、内蔵したコンピュターで速度、位置、進行方向などを求めて航行するナビゲーション。

*衛星航法

全地球を有効範囲とする人工衛星を利用した航法で人工衛星の位置が正確に捕捉できることから複数の衛星から同期をとって発射された電波が航空機で受信されるまでの時間差から、各衛星に対する航空機の距離を知ることができる。





1950年代後半にDC6Bの改良機種であるDC7Cが最後のピストン機として華々しく登場

◆太平洋航路
椰子の木聳える、オアフ島ホノルル

で、その電波を発射する地上施設の一局。広島に原爆を投下した「エノラ・ゲイ」機はサイパン島から飛び立ち、このロラン局を利用して自機的位置を確かめていた。



＊ロラン局

2定点からの距離の差が一定な点の軌跡は、その2定点を焦点とする双曲線になるという原理を利用して現在位置を知る方法

した。2500馬力の6Bにたいし7Cは3400馬力と一回り大きくして航続距離を伸ばし、ホノルルまで直行可能にした。しかしその分エンジン回りの機構が複雑となり、洋上でエンジンがよく故障するのが泣きどころであった。

それでもホノルルへ直行できることは乗客にとっては大きな魅力であり、客室は常時乗客であふれていた。

羽田を夕方離陸して翌朝10時ごろホノルルに着陸したが、搭乗員にとっては11時間を超えての飛行時間であり、それは氣力、体力の限界に近かった。

飛行技術的には追い風（ジェット気流）を最大限利用するタイム・フロント方式が航法技術者と気象予報者の研究の成果として開発された。

詰まり最短距離上を飛ぶコースを選ぶのではなく、距離を多少犠牲にしても追い風成分を有効利用して遠回りでも飛行時間が短縮できる航路を選ぶ方式である。

それには高層の気圧配置の予想が適正であることが必要であった。

初期の頃は手書きでタイム・フロントを試行錯誤して航空図上に描いた。従って飛行航路はその日毎に変わったものである。

○ホノルル

徹夜作業の疲れで車中居眠りすることがよくあった。あるときは甘美なパイナップルの香りで目覚めてここがハワイであることを実感させてくれた。

元々ハワイ諸島は、200年程前（1778年）イギリス探検家ジェームズ・クックが発見したが、1810年カメハメハ大王がハワイ全島を統一した。ホノルルはハワイ王朝の首都であり、ワイキキを王朝一族が避暑地としていた。150年ほど前（1821年）、宣教師の保護や水や食料補給の目的で米軍艦がしばしばホノルル港に投錨した。その後白人達が土地を入手して砂糖キビ耕地を広げ、その労働者を確保するため日本や中国から移民を募集したのが、「ハワイ移民」の歴史の始まりである。

1892年（明治25年）ハワイ共和国初代大統領らによるクーデターでリリオ

カラニ女王が王位から追われ、6年後ハワイは米国の準州に、1959年8月、合衆国51番目の州として認められたという経緯がある。

総人口126万人のうち90万人がこのオアフ島に住み、ホノルル、ワイキキには40万人弱が集中しているとか。1930年頃までは「水が湧き出る」と言うハワイ語の「ワイキキ」は、現在高層のホテル群が立ち並ぶ地域であるが、その昔この一帯は湿地帯でタロ芋畑や椰子の林であった。その後アラワイ運河掘削時に出土した土砂で湿地帯を覆ったと言われる。戦時中(1941~1945年)は全島軍事基地と言ってもよく、基地収入が観光収入を遥かに上回った。しかし今や観光事業が花形産業であり、世界中から人々を呼び込んでいる。

ハワイ諸島

タロ芋畑

椰子の木

日本にハワイ事情を紹介したのは

1804年、若宮丸の漂流者が口述した「環海異聞」という見聞記が最初であり、翌年稲若丸の漂流者も「夷蛮漂流帰国録」を残している。これらは気候、風土や島民の風俗、生活様式などについて、見聞した模様をいずれも口述したものである。

1860年

咸臨丸艦長勝
麟太郎は、サ
ンフランシス
コから帰途ホ
ノルルに立ち寄り、その時の印象を「海軍歴史」の中でこう語っている。「王名はカメハメハ土人種なれども状貌雄偉にして儼然国王の儀容具われり。式終



えて懇話あり、また言わるるよう明年は、予日本皇帝を訪問し、貴国に到るべし……」と。しかし実現しなかった。

ハワイへ渡航した最初の

日本人は明治元年から同18年までの350人であるが、彼らを「元年者」と呼び、先輩として羽振りをきかせていたという。その後29000人の出稼ぎ移民がハワイ諸島に住み着いた。

数年後の或る日、日米戦争の火蓋をきった真珠湾(ワイキキの西方)へ出掛けてみた。そこには日本海軍の攻撃により1100人を超える乗員と共に、海中に没した戦艦アリゾナ号が沈没しており、それから20年余を経過したその頃でも、海底から泡立ち、未だ流出をつづけている黒い重油を目の当たりにした後、アリゾナ記念館内を覗いてみた。その一角に磨き抜かれて光沢を放つ石碑の前で碑面に深く刻まれた1100名の米国将兵の名を喰い入るようにつめていた一人のアメリカ人の眼に悲痛な光が浮かんでいた。

戦争のもたらす悲劇の傷痕の深さをそのときほど思いしらされたことはなかった。

オアフ島

椰子の浜辺

かつて沖縄ハワイ移民一世は、娘がホノルルで日本海軍の投下した弾で被弾し、絶命したわが子の悲しみを湿りがちな言葉で話したあと、次のように語ったことがある。

「アメリカは立派なキリスト教国だがの、戦争のやりかたが悪い。なぜなれば沖縄でのやりかたは、飛行機からガソリンや石油を落として、みな焦土、殲滅。もう島の先の方から焼いてそれから上陸してくるから人間も家もみな焼いてから……。それは本当の戦争ではない。本当の戦争いうたら、日清、日露の戦争のように、陸軍、海軍、飛行機で勝負をわけるのが当たり前だ。広島、長崎で何十万という非戦闘員に爆弾を落として殺すというのは、これはアメリカのやり方が悪いと、わし、外人とだれとでも話す時に言いますよ。」（沖縄ハ



訴えかけてくる。

帰途、青インクを流したよ



く椰子の木を見ながら、平和の常夏の国ハワイにすることが不思議でさえあった。（以下次号に続く）

うなラ
イトブ
ルーの
空の下
で、何
事もな
かった
ように
亭々と
天を突

お礼のことば

辻 あつ子

本日は偲ぶ会を開いて頂きまして皆々様お忙しい中有り難うございます。

昭和二十三年十月六・三・三制になり山城高校に転勤になり昭和五十九年三月迄三十六年間山城一筋に勤めさせて頂きました。その間体操・ラグビー・バレー・少林寺等クラブを持ち、特に体操はインターハイ、国体と良い成績を残せたのも日々厳しい練習に皆様の協力のお蔭だと感謝致して居りました。

五十八年十月山城祭の時に体調を悪くし、翌年三月に停年二年を残し、退職しました。

退職後は毎朝十キロ散歩し、週二回御婦人方にストレッチを教えに行く生活をして居りました。

平成八年四月に心筋梗塞になり一晩に二度電気ショックで命をとりとめてくれました。以後四年余りなんとか平穏に過ごして居りましたが、平成十二年十二月七日（二ヶ月入院で肺炎）旅立ちました。常々良き時代に勤められて感謝して居りました。本日は失礼して申しわけありません。

皆々様の御健康とご多幸をお祈り申しあげます。ありがとうございました。

山城サッカー部に感謝

4回 並河 清

体育の落ちこぼれは、各クラスに一人や二人は居る。その一人が私である。跳び箱は跳べず、長距離走では頑張っているのだが、常に最後尾に近かった。併設中学時代、今は亡き林映君から、その私に対して誘いがあり、サッカー部に入部した。当時の部長は体育の布川先生であつたが、練習にお顔を見せられたことは少なく、二年先輩の森貞男さん（後の山城高校校長）が主将であると同時に、監督兼コーチであつた。

運動能力の欠如した私にとっては甘い練習ではなかつた。部員数が少なかつたためもあつて、高一と高二の時に数度公式戦に出場させていただき、得点した記憶もある。当時は選手交代のルールはなく、試合開始から終わりまでのフル出場であつた。加えて高二ではマネージャーの仕事も兼務した。この際持久力の増大に加え、リーダーの在り方、フォロー

の仕事、チーム活動など、無意識の中に多くの事を学んだように思う。

このような高校生活では大学への進学は無理と判断し、高二の終わりに退部したが一浪した。両親が農に関連していたためもあつて、農学部に進み、大学院の修士課程を終えて農林省に入省、希望して北海道農業試験場に勤務した。

北海道には作物や農作業にとって不利な特殊土壌の地帯が多い。重粘土、泥炭地、粗粒火山灰が挙げられる。オホーツク海沿岸近くの北部丘陵地帯は、重粘土からなっているところが多い。この土壌は粘土含量が多く、強酸性で固結し、表土も浅い。京都の農地に比べ、これが畑地かと、想像外の固さであつた。そのため家畜の餌となる牧草の生育も芳しくなかつた。新しい耕し方を導入して、草の生産量を増やし、さらにはこの地帯の農業振興を図ろうとして、試験に取り組む事となった。

従来の農業機械に加え、新しく耕す機械を二機種試作し、種々の耕し方からなる草地造成試験を行った。試験と言つて

も、一〇ヘクタール以上の荒地地を、条件を種々変えて、耕耘、施肥、播種するのであり、かなりの作業量となつた。ここで一ヘクタールとは一〇〇m四方である。当時の山城高校のグラウンドの面積は実質その四割ではなかつたらうか。

現地の人を含む十人弱による、早朝から夕刻までの共同作業であり、サッカー部で向上した持久力、リーダーシップとは何か、フォローシップ、チームとしての仕事の在り方等、無意識の内にも多くのことが役に立っていたことに気付かされた。

この地帯の農家はこの試験を期待していたようで、種々の造成法の経過を農家なりに評価し、現地での作業が終わる頃には、一つの手法に白羽の矢を立てていた。データーの整理を終え、結果に基づいて提案をする以前に、早々に私共の試作機の一つを基に、農協が新しい機械をメーカーに発注していた。その後、千歳空港近くの粗粒火山灰地帯の草地造成法の試験、美唄（びばい）での泥炭地水田への農業機械導入試験等、現地試験が多

くなった。ここで泥炭土とは地表水が滞留した地帯に湿地植物が繁茂し、その遺体が分解せずに堆積した特殊な土である。北海道ではこの地帯が土地改良されて立派な水田地帯になっている。現地、現地も良いが、基本から学び直すため、重粘土草地造成試験地の牧草の生長を確認して、三十歳を機に京大に移った。

いつの頃かオホーツクの重粘土丘陵地で、造成試験を基に、約二六〇〇ヘクタールの草地が造成あるいは更新され、草地酪農が普及している旨聞こえて来た。それから三十年後、試験の跡地や付近の農業を見学に行ったが、牧草も青々と育ち、農家が活気付いている実態を見て、感慨一入であった。

京大に出向し、停年まで勤務し、その後発展途上国の農業機械技術者の技術指導を続けた。山城サッカー部では劣等生であったが、サッカー部での生活で得たことが、その後の社会生活で大いに役立ったと、先輩同輩に感謝する次第である。

後記(1) 当初原稿依頼があった際、現

職時代の仕事関連のテーマが挙げられた。しかし山城高校の後輩に同じ分野の先生が二人おられる。一人はこの春東京農工大学の副学長を退任された先生で、もう一人は京大の名誉教授で、現在京大の特任教授である。農業の生産技術は刻々と発展しており、これらの優れた後輩を前に、時代遅れとなりそうな記事は遠慮したほうがよさそうである。代わりに一昔前の事を書くことにした。

(2) この記事の一部は山城サッカー部五十周年記念誌に掲載されているものと重なる。記してご寛容を願う次第である。

紡ぎだされた記憶

5回 杉田 博明

遠目にも、その人が井口先生、とすぐにはわかった。

療養されていると聞いて訪ねた特別養護老人ホーム「ヴィラ稲荷山」。広い談話室にくつろぐ何人かの老人のなかで、やはり車椅子ではあったけれど、ひと際

ピンと背筋の伸びた姿に、不思議な確信があったのだ。

三年間の高校生活を思い返して、井口先生がわたしたちのクラスの担任であったことはなかったし、担当されていた社会科選択科目の地理の講義を受けることもなかった。まして親しくお話しした記憶もない。卒業以来、五十八年の間にもお会いすることなかった。にもかかわらず先生を直感したのは、いつも校内で見かけた真つ直ぐな背中の印象が無意識のうちにあったせいかも知れない。

井口先生を訪ねたいと思ったのは、ひよんなことが発端であった。

平成八年夏——一通の封書を手にした。濃淡の墨が美しい毛筆の宛書で、差出人に「井口尚輔」とあった。失礼ながら、にわかにはそれが誰かわからない。開いてみると、ホッチキスで綴じられた冊子が同封されていた。表題に「鎖川柳『雲居なす 巻』」。追文からわかったのは、昭和二十七年五月、われわれの修学旅行に際して宮崎から熊本に向かう列車のなかで、生徒有志と随行の井口先生たちによって巻かれた句集である。原本は長く井口

先生のところに眠っていたのを「佐藤（藤永）暢子さんのご厚意」でワープロ化、これを機に発吟者全員に送られたのである。末席に名前を連ねていた、こちらにもおくっていたいたというわけだ。

振り返って、それがなぜだか理由はよくわからないけれど、卒業後、高校生時代にあれこれ思いをめぐらすことはなかったような気がする。車中の、鎖川柳の即興には、冊子を手にしても「へえ、こんなことがあったのか」と、なんとも覚束ない。鎖川柳は、昭和二十五年に長尾伴七先生に引率された三回生が関東旅行で試みたのがはじまりという。こちらは恥ずかしながら、そんなことすら無知な発吟者であったのだ。

けれども、数ページに満たない冊子は、わたしにとってすっかり忘れていた高校生時代の取りとめのない記憶の断片を次々に思い出させてくれる、きっかけがあった。鎖川柳の趣向は、腰折れの発吟にもかかわらず、高校生ながら数寄ぶつて連歌のような真似事をして楽しんだことにちよっぴり小鼻をひくつかせ、羨む友人に語ったりもした。

創案者である長尾先生には、こんな記憶がある。漢文の授業中は、いつも白墨の先端を抓んで、コツンコツンと先生が黒板に書かれる美しい文字に、ただただうっとり。一度、漢字の読みを名指しして質されたが、そんな態度だから、即答できるはずがない。顔を真っ赤に消え入るよう気持ちだったが、なかなか着席を許してもらえなかった。長尾先生のあとを引き継がれた須羽源先生からは記憶は危ういが、講義が史記の「桃李不言……」だったか李白の絶句だったかに及び、聞かれたのが「桃李」の意味。「桃です」と答えるや、先生の「スモモです」のお言葉。ついつい小声でやってしまった。

「すもももももものうち……」

先生からは、ギョロリと睨まれた。

お仕置きは、期末の成績表で示された。

これはもちろん僻目。

こんな取りとめのない記憶の欠片を折りに触れて思い返すようになって何年かが過ぎ、ある日だった。親しくしている同級生のタケットン（山田武さん）から久しぶりに電話があった。

「有志による食事を西陣の『魚新』で

やるんやけど、いつべん、どうや」

「当日、迎えにいくわ」という逃げ道のないお誘いであつたが、これまで尻込みして一度も参加のなかった同窓会の出席を促したのは、鎖川柳の冊子のことがあつたからにはかならない。

昨年十一月の、この同窓会の席上、長く案じていた井口先生を小林藤樹さんにそれとなく聞くと「元気なはずやで」。誰かが評していたが、さすがに情報通で知られ、頼りになる「五歳年上の同級生」だ。やがて年が替わって「伏見の特養で療養されておられる。よければ、いっしょに見舞いに行きますか」とお誘いをうけたのだ。

表情豊かに、とはいえなかったにしても、当日、鎖川柳の顛末を井口先生から聞くことができた。昨日のように学生時代の高林さんの活躍ぶりを語られる姿には傍らで聞いていて、いささか嫉妬めいた気がしないでもなかった。それでもわたしにとっては青春の日々を次々に思い出させてくれる「記憶の壺」とでもいえる貴重な冊子を送っていただいたご厚意を噛み締め、心からの感謝を直接に伝え

ることができたと思つ。
先生にいただいたお手紙のなかから短
歌を一首――。

やがて湖底へ日は沈むなり
あかあかと
今日の一日稔り多かりき



(恩師、井口直輔先生の近影)

二〇一〇年秋、九十四才

(井口先生は昭和二十五年四月より昭和三十一年三月まで山城高校にて社会科地理を担当された)

野本学級の軌跡について

5回 種村 藩

野本学級会は二年七組(昭和二十六年)担任は数学の野本陸郎先生。クラスの人々が昭和五十六年十一月八日(日)に初めて全員に呼びかけて行なったクラス会で友田忠一君と福永(五百磐)美和さんには大変お世話になった。それ以来毎年十月か十一月に行なった。平成十八年よりは昭和二十八年卒当時の野本先生のクラスの方々も合流した。此の会の特徴は殆ど毎年会場を変えている事と宴会前に会場の近くを散策する事です。多くの方々に喜んで頂いて居ります。

平成二十二年には三十回になりました。

第1回	西陣魚新	男14	女9
第2回	西京釣池洲	男12	女4
第3回	比叡山ホテル	男14	女8
第4回	神戸天京	男14	女2
第5回	石山三日月楼	男17	女6
第6回	東向日うおか	男15	女6
第7回	八瀬古里	男17	女3

第8回	宇治静山荘	男17	女6
第9回	奈良飛鳥荘	男15	女7
第10回	南禅五右衛門	男19	女7
第11回	松尾とりよね	男12	女5
第12回	山科佳楽	男15	女3
第13回	鷹峯光悦荘	男12	女5
第14回	東山きよみず	男15	女3
第15回	高槻かじか荘	男14	女2
第16回	西陣鳥岩楼	男11	女2
第17回	雲ヶ畑洛雲荘	男13	女2
第18回	東山やまざき	男15	女3
第19回	四条木曾路	男14	女6
第20回	西陣魚新	男16	女4
第21回	石山千松	男12	女2
第22回	岡崎洛翠	男12	女2
第23回	祇園左阿弥	男13	女4
第24回	宇治亀石楼	男13	女3
第25回	貴船きらく	男10	女1
第26回	山科華佳楽	男10	女6
第27回	京都鶴清	男8	女7
第28回	岡崎御殿荘	男11	女8
第29回	北野紅梅殿	男7	女4
第30回	伏見魚三樓	男10	女4

散策はいろいろと行きました。

◆母校山城高校◆延暦寺◆神戸異人街◆石山寺◆善峰寺◆万福寺◆東大寺、春日大社、興福寺、◆永観堂◆嵯峨野めぐり(大河内山荘も)◆山科毘沙門堂◆光悦寺◆清水寺◆高槻神峯山寺◆北野神社、千本釈迦堂◆岩屋山志明院◆南禅寺◆涉成園(枳殻邸)◆大徳寺孤蓬庵◆坂本日吉大社◆インクライン、疏水記念館◆知恩院、円山公園奥部◆宇治興聖寺◆貴船神社◆山科天智天皇陵、寺二ヶ所◆仲源寺、建仁寺、恵比寿神社、宮川町花街◆真如堂、金戒光明寺◆北野神社の御土居で紅葉見物◆伏見長建寺、大倉酒造(月桂冠)、寺田屋、西岸寺(油懸地藏)等々を散策・見学を行いました。

小生達、平成二十三年には満七十七才になります。小生達が同じクラスになったのは山城高校の二年生の時だった。それから六十年が夢の如く過ぎ去った様に感じます。残る人生を元気で楽しく有意義に過ごしたいと思つて居ります。

森本美津男、金森義雄、高橋款、馬淵利夫、福永(五百磐)美和、青谷(原)多恵子、逸見(瀬戸)好子、野本陸郎先

生は宇宙の果てに旅立った。
体調が悪くて出席出来ない人々が増して来てますが、今後も続けられる限り頑張ろうと思つて居ります。

吉田元監督の「京都スポーツの殿堂」入り記念会に参加して

11回 杉浦 和重

山城高校の偉大なる大先輩、元阪神監督吉田義男氏が、新しく創設された「京都スポーツの殿堂」入りを果たされ、その記念会が平成23年3月22日、ウエスティン都ホテルで開かれました。スポーツの殿堂入り祝賀会の予定が3月11日に起こった東日本大震災に配慮して東日本大震災復興チャリティ「京都スポーツの殿堂」入り記念会とされ花街の歌舞音曲などを抜きにした会となりました。

始めに選考委員で発起人の内田昌一氏のご挨拶のなかで、殿堂入りはスポーツを多くの人に広く伝道された功績も含ま

れること、八十数人の候補の中から選ばれたことなどが告げられました。

そのあと府立医科大学長の吉川敏一氏からは暖かく親しみ深い吉田氏のお人柄が紹介されました。

大震災復興チャリティは吉田氏の強い思いであり、出席者などの義援金に合わせて吉田氏個人の義援金が門川市長に手渡されました。

山城高校に入ったころ、先生から「君らは阪神の吉田選手を知ってるやろ。彼はこの山城の出身なんや。スターになった今でも時々後輩を見に来てくれる。」と目を細めておっしゃるのを聞き、また放課後にあの人が有名な吉田選手だとあこがれて仰ぎ見たのをおぼえています。

500人を超える盛大なパーティーは京都の政財界の人材を網羅した感がありましたがやはり山城OBの存在は、大きなものがあり、同じテーブルの紳士が同級生のお兄様であったり、受付を手伝っていただいた美しい女性が、仲間の妹さんであったり、山城OBにかこまれた会でした。

多くの方には周知の事ながら、吉田氏は阪神の現役時代、牛若丸と呼ばれて大活躍をされ、その後阪神の監督を3度おつとめになりました。1985年にはリーグ優勝、そして西武を破って日本一を達成されました。

1989年から1995年まで フランスナショナルチームの監督をつとめました。来賓には京都の有名人をはじめ、監督がお育てになったプロ野球選手の顔も多く見られました。最後に吉田氏から謝辞と、大震災にあわれた方への追悼と激励のご挨拶が有り、華やかな会の幕を閉じました。

宇宙開発四十年

11回 長谷川 律雄

昨年は、小惑星探査機「はやぶさ」が地球に帰還したことで、日本の宇宙開発が大きな話題になった。昨年は日本最初の人工衛星「おおすみ」打ち上げの40周

年に当たる。

科学衛星打ち上げ計画が始まったばかりの一九六六年に私は三菱プレシジョン(株)に就職した。その頃、宇宙研(宇宙航空研究所、後の宇宙科学研究所)を中心として関連メーカーが協力して、F型ロケットの開発を始めていた。実際のロケットの製作は各メーカーが得意の部分を担当し宇宙研が取りまとめた。

三菱プレシジョンは、三菱電機と米国のジェネラルプレシジョンとの合弁会社でF100戦闘機用の最新のジャイロを技術導入していたため、ロケットの姿勢制御装置の製作を担当した。姿勢制御装置はジャイロを使ってロケットの方向を計測して自動操縦する機械である。

就職後、会社の宇宙開発グループに配属された。このグループはほぼ全員が二十代の若い技術者であり、ロケットは未知の世界であった。そこで、色々な資料をもとに、発明されたばかりの米国のF(集積回路)を使用することにして、英語のカタログを参考にして姿勢制御装

置を設計した。

一九七〇年二月十一日、F100号機により人工衛星「おおすみ」が打ち上げられて、日本は世界で四番目の人工衛星打ち上げ国になった。

F型ロケットは科学衛星を打ち上げるM型ロケットのための小型実験機であり、最初の科学衛星「しんせい」は一九七一年九月二十八日にM型機で打ち上げられた。

M型ロケットは4段式固体ロケットであるが、第一段から第三段までは姿勢を計測するだけで実際に制御するのは第四段の方向だけであった。そのため、M型ロケットはシステムは簡単であるが精度が悪かった。そこで、第一段からの姿勢制御を開発することになり宇宙研に着任された川口淳一郎助手(後の「はやぶさ」のプロジェクトマネージャー)と一緒にロケットの第一段の姿勢制御方法を検討した。

第一段の姿勢制御は複雑で、従来のアナログ方式の姿勢制御装置では対応できないので、マイクログロッセッサを使った

デジタル方式の姿勢制御装置を開発した。

一九八五年一月八日、デジタル方式の姿勢制御装置に制御されたM-3SII-1号機によりハレー彗星探査機「さきがけ」が打ち上げられた。

「さきがけ」は太陽を回る軌道にのり、日本で最初の人工惑星になった。これは固体ロケットによる世界初の人工惑星である。

固体ロケットは、液体ロケットに比べてシステムが簡単であるが、速度制御が出来ないため、軌道精度が悪く、人工惑星の打ち上げは不可能であると考えられていたが、「さきがけ」の成功により、日本の固体ロケットの技術が高く評価された。

宇宙研最後のロケットは、M-3型ロケットである。このロケットの姿勢制御装置には、国産の光ファイバージャイロ(FOG)を使うことになった。FOGは従来の機械式ジャイロに比べて高性能ではあるが振動に弱い欠点があった。ロケットの振動に対処する方法を見つけるため

に半年開発が遅れて宇宙研の先生方や多くの関係者に大変ご迷惑をかけた。

その頃宇宙開発の不具合が続き、新たに開発するM-3型ロケットが失敗すれば宇宙研自体の存続が危ぶまれる状況のなかで、一九九七年二月十二日にM-3号機が打ち上げられた。人工衛星「はるか」が軌道に乗ったことが確認されたとき宇宙研の先生方から握手を求められた。

この開発を最後として、三菱プレシジョンを退社した。

その後、二〇〇三年五月九日、M-3号機により小惑星探査機「はやぶさ」が打ち上げられた。この年、宇宙研は他の宇宙関係機関と統合されて宇宙航空研究開発機構(JAXA)の一部門となった。

ご承知のように、二〇一〇年六月三日、「はやぶさ」が小惑星「イトカワ」の石の欠片を持って地球に帰還したことにより、世界初の小惑星サンプルリターンが達成された。

日本文学士院賞受賞

梅原郁 京大名誉教授(三中21年入学)

梅原 郁氏は過去50余年にわたり、中国の宋代における官僚制度の研究をライフワークとしてきました。その最新の成果が『宋代司法制度研究』(創文社、2006年12月)です。

唐朝半ばの「安史の乱」から約200年つづいた社会の動乱の中で、律令および三省六部の制が有名無実となった後、宋朝は唐律令の骨組みに沿いながら、その内容を新しい社会の現実に対応するように再編し、これが元朝・明朝・清朝へと受け継がれました。変革と再建の時代であるだけに、制度の復元は至難の作業でありました。本研究は膨大な史料を駆使しながら、まず官僚機構とその運営を詳細に復元し、その実績に立って中央から地方におよぶ司法機構とその運営を明らかにしました。

これは前人未踏の業績であり、いったん形骸と化した唐の律令と三省六部の制が、いかにして内容を一新して再組織され、明・清へと受け継がれていくかを緻密に解明した画期的な制度研究の労作です。

ザビーネ先生とドイツ・ボツ フム大学

19回 中村美知子

ボツフム（・ルール）大学は学生数35,000人を有し、スタッフの数は15,000人を擁するドイツでは有数の大学のひとつである。20学部あり、その中の東アジア研究部には650人が在籍している。その中に日本学があり、200人程が日本史或いは日本語文学科に籍をおいている。

日本語日本文学科では学士の場合、一年生前半で日本語の文法、漢字、会話を、言語学では言語史、方言など、後半では日本語文法体系などを学んでいる。

二年生では日本語の会話作文や読解、統語論など、古語においては、平安時代の文法及び百人一首などを学ぶ。

三年生では日本語史や上代語、中世日本語、日本語体系の方言や音韻論や文語、漢文などを学ぶ。その後口述試験や学士論文があり、そしてその後それぞれが自分の専門の分野の研究を推し進めていく。

他にも多くのドイツ人に限らないが外国人の学生や、研究者が日本の歴史や言語学を彼の地で学んでいる。欧州圏で日本に関する研究発表会が開催される場合、共通語は英語である。他国語を学ぶ場合にはどの国に所属していても国際学会となるとやはり共通語は英語となる。

ザビーネ先生が師事しているボツフム大学のトメ教授はポーランド人であるが日本の古典に通じていて、特に古今和歌集、土佐日記、方丈記等の専門家でもある。ザビーネ先生の友人で2010年秋に来日したクリストファーさんは琉球語の研究のために現在京都に在学中で京都大学に通っている。京都大学には多国籍の外国人学生が日本史や言語学を学んでいる。

山城高校のドイツの姉妹校であるフィルダー・ベンデン校のザビーネ先生はドイツで紫式部の研究をしておられる。数年前に日本へ来られた時に山城高校との交流の機会を得た。

それ以来両国の学生の交流が続いており、2011年秋にはドイツからザビーネ先生の引率で山城高校との交流のため学生たちが来京する。

ザビーネ先生は現在、ドイツの高校生

向けの日本語の教科書を作成中である。日本社会や日本語の微妙なニュアンスを理解しておられるのできつと良い教科書ができるものと期待される。数度の来日の折も興味の対象は平安時代であって金閣寺や銀閣寺などは時代が新しいとおっしゃっている。

山城高校のみなさんまたドイツへ来てください

フィルダー・ベンデン高校の生徒たちにとって学校交流での京都滞在の経験がすばらしい思い出としていつまでも忘れることなく語り合っている。何故ドイツの若者は日本がそんなに好きかときいて訊いてみると、先ずいい友達ができたからとの返事が返ってくる。

言語の壁があるが、初対面の時から、日本語や英語やそれに手や目でコミュニケーションが始まって努力して会話を続けているうちに心が通じ合う。

フィルダー・ベンデン高校では2009年から日本語が選択科目の中に加えられたけれど、生徒たちは日本語を話す機会がないので、まだ上手ではない。生徒たちが日本語を選択するというのは、日本へのあこがれや興味のあらわれである。同

世代の日本人と交われるこの山城高校との交流の機会がとても大事である。短時間でのドイツでの日本語の勉強の習得レベルはなかなかあがらないが、来日した生徒たちは山城高校の生徒たちと実際に話をする機会を得て日本を実感し、すばらしい体験をしている。

山城高校に通う期間は二週間であり、その期間内、毎日学校に通うわけではないがその間に生徒同士友達になる機会があるが、交流行事の一つとして週末に両校の生徒が清水寺へ同行する。行動を共にして会話が生まれ友情が生まれそのことが後々まで大切な思い出となってみんなの心に残っている。

両国の文化の違いを互いに交流を深めながら認め合っていくのも大きな発見でもある。その中でも一番心に残っているのはホームステイである。日常生活を日本の家族と共に体験させてもらうことは貴重な経験となり生徒たちの大切な思い出となっている。

今年の秋、10月28日から11月12日まで20人で京都を訪れる計画をしています。中田先生や中村さんの協力を得て山城高校での滞在プログラムや京都観光を楽しむ

みにしています。

山城高校とフィルダ・ベンデン高校とのこれまでの交流の成果が上がっているとベルリンの日独センターからも認められています。

2008年以来山城高校からの訪独が途絶えています。是非また来てください。滞在期間中学生さんたちには全員ホームステイの用意があります。いつでもお迎えします。生徒や地元の人々も共にお待ちしています。



ドイツ・フランス珍道中

59回 西原 陽子

きっかけは我が家にホームステイしたユリアと私との「ドイツに来てね」「行く行く」といった軽い約束からであった。今年我が家は私の就職・弟の成人・妹の大学入学、そして両親の結婚式とお祝いムードで、私・弟・妹と母との珍道中が実現したのである。残念ながら父は同居の祖父母が居るのと仕事があるため留守番となったのであるが私達はのびのび旅行を満喫することとなったのである。

三月四日（金）夜関空を出発し翌五土曜の昼ドイツに到着、ユリアのお母さんザビーネさんが空港に来てくださりユリアのお宅にお世話になった。

六日はザビーネさんとユリアとユリアの妹グスタちゃん和ザビーネさんのお友達と私達とでオランダ・アムステルダムに連れて行っていただいた。水上バスに乗って観光しその後おみやげを買った。チーズのお店で買った大きな丸い手作りチーズは大好評であった。チューリップの球根は上手に育てられず失敗に終わってしまった。

七日（月）ドイツはカーニバルで休日らしく、ケルンでお祭りがあると言うので私達はタリスに乗ってケルンへ。ケルンは大聖堂が駅の目の前にあり迷わず到着。行きのタリスから他の乗客はビンでワインやビールをラッパ飲み、ちよつと怖いながらも、私達もそれなりに大きいので四人結束して人波に突入。カーニバルはまるで祇園祭りさながらの人ごみでパレードは大きな馬車から貴族の仮装をした人やお菓子を撒くのである。妹も二つキャッチしご機嫌であった。

八日は早朝バスでユリア宅を出発、タリスでベルギーへ。私の大学の友達の友達でベルギー市内を案内してくれ、ゆつくり観光しレストランで食事しワッフル・ビールを堪能しチョコレートをお土産に買って、友達に御礼をいって別かれ再びタリスでパリへ。夜遅くにホテルに到着。

九日から十二日までの四日間メトロを駆使してベルサイユ宮殿へ一日、後の三日間はパリ市内を自由気ままに散策し



た。メトロと徒歩でエッフェル塔・凱旋門・ノートルダム寺院等観光し、ルーヴルやオルセー美術館を見学し、ガイドブック片手に買い物とパリも満喫し十二日朝ホテルを後にした。

十二日タリスでドイツに戻り再びユリア宅にお世話になる。十四日帰路につくまで風車の見学やユリアお勧めのELT城へ行ったりドイツのスーパーで買い物したりととても有意義に過ごさせてもらった。そして十五日に無事帰宅したのである。

家族四人私が多少の英会話が出来た程度であとの三人は殆ど英語も話せず、当然ながらドイツ語もフランス語もわからないままの十日間は、多くの人の助けを受けての旅行でハラハラドキドキの楽しい珍道中であった。

今回の旅行はユリアの家族みんなに会えたし、家族での旅行も次は何時行けるかもわからないし、自分でチケットやホテルを取ったりと準備から行程までいろいろできたことは今後の自信にもつながるよい経験だったと思う。



油彩

三人展

萩野一彦 久保田祐弘 河辺成徳

旧制京都府立第三中学校 第35回同窓



三五回の会員三名が個展を開催されたので見学に行った。会場についてまず驚いたのは入り口横の壁に「京三中校歌」が貼り出されていたことである。そしてウインドウには三人三様の特色のある絵が三枚道路から見えるように並べてあり、いかにも見物客を誘い込むような雰囲気がつくられていたことである。

会場に入って展示品を見学すると、まさに三人の個性が夫々の作品に現れており、三人がよく力を合わせてすばらしい展示会を開いたものだ、三五会員として嬉しさと誇りを感じた。

約一時間余、会場に居た間に、数十人の人が見学に見えたが、私も自慢げに御相手をさせて頂き、大変勉強になった。

三人展の盛会をお祝いすると共に今後一層の精進を祈念する次第である。

三十五回 大島達也

会員からのたより

三十一回 平井 邦男

お蔭様で新年を迎えることが出来感謝しております。折角のことですから拙文又簡単ですが投稿いたします。前もって申し上げますが、これから書くことは私のありのままの考えです。私達が一番望むところの健康は一番の財産であり、又宝物であると考えます。人間寿命がありますが、日々健康でありたいものです。それには一番大切な事は「怒らないこと」、一番は「愛し感謝すること」です。「感謝」の字を分析しますと「感」の中には「心」と言う字があり、「謝」には身が含まれています。即ち「心身」両面健全でなければならぬと思います。「身」の健康法は割合に実行しやすいですが、「心」の健康法は難しいです。しかし高齢者には特に必要ではないかと思えます。世の中の森羅万象に取り敢えず感謝しております。最近のニュースには心が休まないで、正直いやになります。

極めて簡単ですが、最近考えたことを書きました。ご多幸を祈念いたしました筆を措きます。

三十一回 山谷 朗

私は昭和十年から十五年の間、京三中生として戦時下の中学生生活を送った。昭和十九年の秋入隊。終戦の年の十月半ばまで名古屋より鹿児島に高射砲兵隊で約十一ヶ月を送った者である。

戦後昭和二十一年の春から東京の生活を始め、只今は八十才代の半ばを超える長い人生を送るに至り、この六年限は東京の同窓会にも御無沙汰、三年程前まで同級会を年に一回昔なじみの友人と集まっていたが、年々それも加齢などのため不可能になり、現在に至っている。京都の同窓会も御無沙汰、申し訳なく思っている。

私は三中の校歌の作詞者大塚五朗先生の担任のクラスで育ち、大塚先生には国文法の助動詞の活用変化の暗唱では大変悩まされた思い出が残っている。当時三中はラグビーが強く、全国大会などにも

出場、休み時間にもラグビーをして遊んだことを思い出す。

今の時代と違い、学校教練が酷しく、銃をかついで野外演習にサガの原を走り回された思い出が強い。時代は今と大分変化したが、我が国が日々昔の時代に返ろうとしていることを思うにつれ、戦争のない平和の国であることの有り難さを肝に銘じて守ってほしいと思うものである。

三十三回 大槻 真也

会報、毎々有り難く読まして頂いております。同期の諸兄の元気な消息も拝見して懐かしく思っております。兄等のお世話役、御苦労、御手数に感謝致します。生来の不精者で文才もなく毎日を過ごしてをるのみで不悪ず御許しください。総会には参加致し度いと思つてをります。

三十三回 公手 達郎

これまで「美術閑話」として画家の人となりや作品の批評を採り上げてきまし

たが、今回は蠟染めの大家であった染織工芸家の故佐野猛夫氏を採り上げてみたいと思います。佐野先生は、京都市立芸大教授時代から私共と同じ隣組の住人として、我々と触れ合いの多い日常を過ごされましたが、とりわけ私の場合は、リタイアしてから美術作品の見方や接し方についてご教示をいただいております、平素から同氏を先生と呼びしておりました。そんな事情から、次号には佐野先生の記事を纏めてみたいと考えています。

三十三回 高崎 三之

終に、国家存亡の危機に直面するに至りました。詐欺紛いのマニフェストを掲げて、政権獲得した民主党。未熟なるが故の失政の連続でした。一方、大敗の自民党は小グループを派生し、受け皿たり得ない体たらく。国民は民主党政権に不信任です。自民党は、改めて大同団結し新生することこそ喫緊。日本沈没を危惧するの声を、巷に聞かれます。今こそ国家統治の meltdown 回避へ総力結集すべき秋。似非（えせ）維新を名乗る首

長政党内、ワイマール憲法下で出現した『ナチス』にヒトラーを連想せざるを得ません。同じ『維新』でも、我々が受け止めた『昭和維新の歌』とは大違い。志士ではありませんね。戦中、『ファシスト党』ムツソリーニ張りの右翼の扇動・活動家も出現しました。戦後はいち早く転向し、財を成しましたが……。悲憤慷慨の末、憤死した幕末の勤王家『落つる涙は鴨の水』の高山彦九郎を思い、瘦せ細った老骨を撫しつづの『髀肉の嘆』とは！ なんと皮肉なものです。

【追伸】

終戦前年の十二月、大阪外語からの勤労動員先が翌年正月の陸軍工兵学校入校を前に一ヶ月の休暇をくれました。伊勢神宮、榊原神宮、桃山御陵参拝なども終え、伏見の家で、のんびり昼寝中の七日。正に驚天動地の大地震。その瞬間、半田に動員中の三中生十三名殉難の悲劇を近年、知りました。これが Trauma となつたのか？戦時というには、まだまだ牧歌的な全校兎狩りなどの三中の思い出は、投稿を躊躇せざるをえませんでした。今

回、出欠回答限々に送稿したメッセージ。最終号に掲載は望外の幸せ。応変の編集と印刷。有り難うございました。

GW間近。寒暖は不定。国連は累卵の危殆。御自愛を。

三十四回 浅野 修

昭和十三年に入学し、十八年に卒業しました。先生方は皆、立派な良い人でした。が、一人Sという軍事教官と言うのが、長靴で蹴ったり指揮刀で殴ったり、人間でないのが居ました。カタトニーと言う病人だったのでしよう。

三十四回 橋本 善治

おかげさまで八十五歳になり自分でもつくづく長生きしたものだと思ひ感謝しております。七十二〜三歳頃は若い者に負けるかと、大いに楽しく遊ぶことを考えていましたが、やはり年には勝てず、今は良きじいとして大人しく暮らしております。昨年は悪いことに知人・友人が十人亡くなりました。こんな年は今までなかったことです。唯々寂しさの極で

す。一番困るのは話し相手がなくなったことです。これまででは会えばお互い思うがままにナニヤカヤ時間を忘れてしゃべり合ってホッとした気持ちとやれやれというのかなんとも言えないなごやかな気分になったものです。私、今も自転車に乗り西陣の得意先（織屋）を回っています。が、近頃は道ですれ違った人が頭を下げてくれます。こちらでも下げますが、その人が誰だか解らないので、困ります。これも老化のためかと思っています。

まずはこれからあの人はいよいよおじいさんだと言われるよう頑張ります。皆様の御健康を祈ります。

住所移転しました。

602-0097 京都市上京区鞍馬口通大宮西入ル150 電話四四一—三二二五

三十四回 東野 裕

会報第六号、有り難うございます。素晴らしい編集に感謝しています。小生体調不良、返信がおくれ恐縮です。ご自愛を祈ります。

三十五回 大島 達也

嬉しかったこと
昨年の春のこと、大学を出て幼稚園教諭になった広島に居る孫娘から

「給料をもらった。社会人になってお金を稼ぐことの大変さや、お金の大切さに気付いた。ほんの少しだけど、おじいちゃん、おばあちゃんへ感謝の気持ちです。」と一万円の新札と菓子をおくってきた。私達二人は嬉しくて涙を流した。今もその手紙とお金は仏壇にそなえたままである。

【二伸】

財源捻出

国会議員を減らし、俸給を下げる。

節電

パチンコ・ゲームセンターを廃止する。悪の温床として韓国では法律でパチンコを禁止している。日本ではパチンコ業界から多額の金を貰っているの、議員もマスコミも誰もこのことを口にださない。

三十六回 一谷 彌

懐かしいご連絡、会報等感謝しております。

ます。会員各位役員の皆様の御健勝ご多幸を心からお祈り申します。今後ともよろしく。

三十六回 小倉 巖

七回り目の卯年…八十四歳の当たり年を迎え、戦前、戦中、戦後と、激動の時代をよく生きてきたものよと感無量…そして終始を丸々生きた…昭和も遠くなりけり…との想い一入です。今や平成とは名ばかりで、国家経世の夢も展望もない政治…戦後教育の退廃による自由放漫、金権物欲優先、人道地に落ちた阿修羅の世相を嘆く毎日です。

老い呆けて俳句とパソコンやウォーキング位でお茶を濁す我が余生…

例によって駄句の披露で紙上を汚させていただきますので悪しからず…

七回り跳ねて卯年やおらが春
寒餅に入れ歯取られて八十路かな

天神梅文結ばれて願はれて

花歳々軍記に哀し吉野山

石山の鐘は花よりおぼろにて

沙羅一花はらりと法の庭動く

晩節を問はれてをりぬ敬老日

老犬と真実一路野辺の秋

栗ふむむ老は異なもの味なもの

百窓に百の残照日の短か

小倉 いはほ

三十六回 清水雅之輔

いつもお世話様です。深く感謝をしております。

すでに老齡、八十四才、気持は若いけれど、体力は老化し、ボロボロの状態に近くなりました。

しかし、未だに、毎日事務所に行つて、午前中は新聞をよみ、昼食をとり、帰宅して、週に二、三日は新大宮通りにある、『ぜにき暮会所』で夕方までざる暮をして過ごす事の多い毎日となりました。

周囲、旧友に遊んでくれる人も殆ど少なく、最近では家内を連れて、国内の一泊旅行をよくしています。

双陵クラブの有志も、体力に相当した小旅行をしませんか。今後よろしく、皆様長生きしてください。

三十六回 外山 司郎

前略 越後はこのところ毎日鉛色の雲におおわれ、愈々冬の訪れを思わせる日が続いています。

私も新潟県に来て五十年を過ぎました。幸いにして聴診器を持てる状態なので、いまだに現役で仕事をしています。

戦時中、愛知県半田市で縁のあった高知女子師範の方々と文書による交流が続けております。三中時代の同窓の皆さんもお元気でしょうか。今は当時の思い出にしみじみとふけております。

右現状御知らせまで

三十六回 松阪光一郎

会報御苦労様です。特に書くこともなく、筆無精もひどくなってきました。

三十七回 柄本 欣一

永いサラリーマンを退職して、二十数年経ちますが、やはり最後に関係していた仕事は、思い出が深く街を歩くと、つい街路樹が目につき、とくに春の芽出し、晩秋の剪定が気になります。

最後に、関係していたのは、国際会議

場のある宝ヶ池・岩倉地区での、土地区画整理事業でしたが、事業完了に伴う街路樹の樹種決定のときが思い出深いです。

街路樹の手入れが比較的簡単で、紅葉（黄葉）が美しく、落葉処理がしやすい。旧市街地と違い、沿道には民家は少ないだろう。等々街路樹管理の担当課と、色々話合った事を思い、最後に決まったあの銀杏はどうなっているだろうか？ と思ひ、最後の仕事をいつ迄も思い出せるのも、ある意味では幸福な事と感じ、街路樹の剪定をみています。

三十七回 大住 嘉彦

長い間、大変お世話になって参りましたが、去る九月五日、夫大住嘉彦が亡くなりました。

今迄にお寄せ戴きました御厚情に感謝申し上げます。皆様方の益々のご発展をお祈り致します。（妻、久子）

三十七回 岡 浩三

食糧危機が心配され、世界的な高騰が続いている。戦中、戦後の悲惨な食糧不足を経験した身には、食糧自給の大切さを忘れることは出来ない。

戦後の高度成長、経済大国の掛け声に踊らされ、不足する食糧など「金さえあれば世界からいくらでも買える」との甘い考えで、農地の宅地転換の激化、減反政策の進行と共に、農地離れが止まらず、いつの間にか自給率が四十%まで落ち込んでしまった。今になって自給率の向上が叫ばれているが遅きに失する感がある。

世界人口はまだまだ増加すると思われる。引き換え地球環境は益々悪化、食糧生産もそのうち頭打ちとなり、世界的に不足することは目にみえている。金があっても物がなければ手には入れようがない。食糧不足の悲劇に何時見舞われるか予断を許さない。杞憂に過ぎない事を願うのみ。

三十七回 小川 一郎

要介護二級の認定を受け、ヘルパーさんに週一回の買い物と部屋の掃除をして

もらっている。

有り難いことである。

ヘルパーさんには感謝してもしきれない。

三十七回 榊原 胖夫

日本の長期的な地盤沈下の原因のひとつは教育に対する支出が少ないこと、行なわれている教育が旧態依然たるものであることにあります。GDPに占める学校教育費の割合は、アメリカ七・四%、韓国七・二%、であるにたいして日本は四・八%、高等教育だけをとりてみるとアメリカ二・九%、韓国二・三%、日本一・三%（いずれも二〇〇四年の数字）に過ぎません。この傾向に改善の傾向は見られません。子供手当は学校教育費ではありません。国際的視野をもった若者を育てるのが急務であるのに、今の日本の学生は内向き指向になっているのが現状です。

三十七回 田草川種賢

初雪の風花囀るクリスマス
雷の子や冬かみなりの笑ひ声

この人の霊の随に去年今年
年立つや天つみ空のひとつと
この先のいのち常とは年迎ふ

三十七回 平岡 静哉

昨年もまた、例年通り十二月最初の土曜日に三七クラス会が開かれました。いつの頃からか、この三七会は昭和十九年、愛知県の勤労動員で震災に遭い、十三名のクラスメートを失った十二月七日の直近の土曜日に開くことが決まっているからです。昨年も三十一名の級友と、六名の御夫人が集まりました。その朝、その年の当番を含めた有志の何人かが代表して、山城高構内にある殉難学徒を顕彰する「紅燃碑」に合掌してきたあとに会が始まるのですが、会は例年通り駄弁り、食べ、且つ飲むの賑やかな宴でした。中に、この会にはどうしてもと不自由な体を車椅子にゆだね、介護の奥様と一緒にいるか遠方から来てくれた二人の友を見つけました。

今ではこの二人だけでなく、参加者の誰もが自分の体調が気になる齢になっているのですが、六十数年前のあの鮮烈な

思い出がこうしてこの一年一回の会に駆り立てていることを改めて感じました。

三十八回 折井 久彦

出欠に揺れるノーベル平和賞

ノールウェーのオスロで行われるノーベル平和賞受賞式典に各国大使の出欠が大きく揺れている。と言うのは、中国の民主活動家劉曉波氏が中国に於ける共産党の一党独裁の廃止や三権分立の確立を訴える「08憲章」が、中国に於ける「国家政権転覆扇動罪」に当たるとして、懲役十一年の刑を科し、服役中であることから、中国政府が、各国大使のノーベル平和賞受賞式典に出席しないよう圧力をかけたのである。劉氏の妻や家族に対して、代理出席も認めないと言う、中国政府の強硬な姿勢は、反対に各国からは「世界人権宣言（表現の自由を掲げるもの）に反するだけではなく、中国の憲法にも反する疑いが濃いとして、釈放すべきではないか、と言う意見が出ている。しかし、中国の一方的参加ボイコットの要請に各国大使の間で、戸惑いが表面化して

いるのである。現在のところ、招待した六十五カ国中四十五カ国が出席で二十カ国ぐらゐが欠席という事のようにである。欠席を表明している国は、中国と何らかの関係のある国で、人権や人道的な見地からではなく、両国相互の利害的な関係から中国の圧力に屈した形で、出席を表明しているようだ。ノーベル賞と言うのは、ダイナマイトを発明したアルフレッド・ノーベルが生前残した遺産を基に、前年に於いて、最も世界に貢献した人に贈られるもので、一〇〇年以上の歴史を持つ、権威のある賞である。今回のような中国共産党の独善的な行動は人権を弾圧する国内的な問題だけではなく、それを正当化しようとする、外交的な行動に出ている事は、国際社会からも批判的になるのではないだろうか。中国では、ノーベル平和賞に対抗して、急遽設立した「孔子平和賞」を作り一日前の昨日「北京」で行われたようである。その初代受賞者に選ばれたのは台湾の連戦氏（中国国民党名誉主席）であったが、なんと本人から受賞を拒絶され、授賞式当日に

は、出席せず、代わりにトロフィーを何の関係も無い少女が受け取るという、茶番劇に報道陣からの「失笑」が漏れる有様であったという事です。中国はいまや、世界第二位の経済・軍事の大国です。その力をかざして、世界を支配しようとする自己中心的な行動は、むしろ、自国が世界からの、孤立化を促進している事であって、早く目覚めるべきではないでしょうか。

三十八回 佐々木成夫

京三中双陵クラブ会員の皆様には御健勝にてお過ごしのことと存じます。京三中三十八期生の一会員で平素は幹事諸兄のご尽力のもとに会誌の編集を読ませて頂いております。文面からも半田動員の時の事、辛かった動員中の事などがなつかしく、人生の一端として強い思い出となっています。「人生五十年」と言った時代は過去のものとなり、傘寿を迎えた私共です。小生も中学校卒業後師範学校へ進み、昭和二十五年（平成二年三月三十一日）まで、四十年間の教員生活を勤め、定年退

職後は七十歳迄市教委の嘱託として学校関係で第二のライフワークを辿りました。今は趣味を生かし、ソフトテニスを健康の爲にいそしんでいます。高齢者社会をいかに生きていくかを考えつつ……。双陵クラブの発展を祈っています。

三十八回 佐々木成夫（続き）

（同期会に出席して）

平成二十二年十一月二十八日の三八会総会に参加させて戴く事が出来た事を大変幸せに感じました。今までに何回となく案内状を戴きながら、日時曜日の関係で、欠席ばかり致し、幹事さんにもご迷惑をおかけしておりました事をお詫び致します。と共に今後の総会には出来る限り出席する所存であります。

久しぶりにお会いした方々との積もる話も多く、半田での動員、工場や新池寮での生活、大地震、爆撃……。苦しかった食生活、買い出し（飯場）エビ煎餅等、なつかしい話題が出て大いになつかしかった一時でした。六十年前の生活が、今後共に自分の人生に於いてかけがえのない価値ある一幕であったことを今更痛

感する次第です。

教練

三十八回 高野 浩二

「不動の姿勢は軍人基本の姿勢にして、内に精神充実し、外、厳肅端正ならざるべからず」間違っているかも知れませんが、そのような調子の言葉が、何となく耳に残っています。

確かに何かと厳しい時代ではありましたが、それが辛いばかりでなく、何か甘酸っぱい記憶として残っているのは、単に時の流ればかりによるものではないように思います。

五十嵐教官は石川方面の方だったのでしようか、背負い袋をシテカッテ、などお国言葉でご指導頂きました。朝礼の時、手の指が少し曲がっていると容赦なくサーベルの鞘で打たれた怖い新川配属将校は、査閲の成績が、優良、であった時、生徒に、礼の言葉を口にされました。

大坪教官が、グライダーで直線滑空をされる時、生徒達は、いち、に、いち、に、と太いゴム紐をV字方向に引きました。

お蔭さまで、私たちの世代の人たちは、ちよつと並んでも、その列は整然として、次ぎの世代の人たちと、格差があるのは事実です。

三十八回 高林 藤樹

人見君を偲んで

人見君との出会いは、三中に入学した時です。昭和十七年四月一日、三百名の新一年生は、ズボンが長くなっただけの本当にまだまだひよこでしたが、自分としてはせい一杯生意気でした。藤森校長先生から「君達青年は……。」などと入学式の訓示の中で言われ、もう充分まいあがっていたと思います。そんな中に人見君はいました。そして、私も高宮君もいました。三人は同じクラスでした。

大人になってそれぞれ違う道に分かれますが、人見君と高宮君はラグビーで繋がります。中学生と言えばお互いのみか、先生までも渾名で呼んだりしますが、人見君は「へつとう」、高宮君は「かえる」でした。

その頃の日本は戦争という悲しい、悪

い時代で、暗黒の中学時代を送るといふ事態となりました。昭和十九年七月に学徒勤労動員令が布かれ、我々三年生、四年生、五年生は愛知県半田市の軍需工場に派遣されました。工場での厳しいそしてつらい生活をしいられました。晩年、

高宮君は病を得て、先にあの世に旅立ちました。お別れの日、大勢のラグビー仲間が集まりました。実はその告別式はこのブライトホールであったのです。そして私が弔辞を読みました。ああ、何と言う事でしょう。今度は人見君が旅立つのに、その告別式が同じブライトホールで行われることとなり、私が又弔辞をよむことになったのです。二人は「阿呆会」の交わりを通じて親交を深め、絆を強くしていましたが、今や二人共鬼籍に入ってしまった。昨日、お通夜のあと、「阿呆会」が例会を開いていた酒房「あじやす」へ行って、二人のいない「阿呆会」を思い切り悲しんできました。

人見君は穏やかな人柄で、誰からも愛されましたが、この弔辞を編むにあたり、何人かに質問をしたところ、ある後輩が、

「人見君はだれにでも声をかけてくれる優しい人柄がとても尊敬できる」と言うてくれました。上手にいうなあと思いましたが、「家庭ではどうでしたか」と水を向けるとラガー以上の猛者に見える海上保安官（遺児）が、「怒ったことのない父でした」と答えてくれ、納得しました。

人見君の最晩年は、幅広い付き合いをこなすのに大忙しだったと思いますが、中でも三中同窓会の「双陵クラブ」の月並み会は私も欠かさずおつきあいしました。またある時雲ヶ畑のボタン鍋に集まった時、折しも早稲田大学が優勝したので、料理の席へ人見君宛の祝電を用意したところ、思わぬサプライズをとて喜ばれ、優勝したときにしか歌わない「荒ぶる神々」という早稲田の特別の歌をソロで披露してくれました。これは圧巻でした。

人見君、この世の思い出はつきないでしょうが、それはさておき、天国にあっても、荒ぶる神々に優しい声掛けをしつつ、私達を見守ってください。

では、どうか安らかに御眠り下さい。

初めての寄稿で、何から書き留めれば良いのか正直なところ大いに戸惑っているが、それも、平素の筆不精のせいと反省しきりである。

父の転勤が激しく、中学だけでも三中进行として（三年の四月末に転出）、舞中・新中と色んな土地を回った。

京の地にじっくり腰を据えたのは学芸大（現教育大）以来で、爾来、半世紀以上ここでお世話になっていることになる。

今にして思えば、第二の勤めの途中に編集長のお宅があったのかと気付くと、何か不思議な絆を感じると共に、ただ通り過ぎて行った自分を申し訳なく思う。

民主主義の脆さ、我が儘、資本主義の傲慢と拝金、地球人類の行く末はとても危なっかしい。そんなことを思い知らしてくれる出来事や報道が日々飛び込んで来る。今年はどんな年になりますやら。

京三中魂で頑張りたいと念じています。

三十九回 武用 哲男

脳腫瘍と書き出すと又その話かと、うんざりされる顔が浮かんできますが、これが最後です。ラグビーを教えてください人見さんに礼が言いたくて、告別式に出席した。出棺直前になって、居たたまれず柩の前に飛んで行き「オオキニ」を言うつもりが何かおもはゆく「ヘットはん、サイナラ」と言ってしまった。今でもすつきりしない。医者の話によると、複雑骨折して命拾った人の顔末はヨイヨイかグズグズかバイバイと決まってる感じ。それを人見ラグビーは人数が多いので名前を書きませんが、御存知の面々で、朝から晩までスクラムくく。復員してきた先輩たちも来てはスクラム。坊主頭のぶっつけ合いのこすり合い。中身は空っぽでも、面の皮より厚くて丈夫。だから少々の複雑骨折などこたえません。ヨイヨイになって中風がでて、下半身不随。グズグズになって癲癇になって、手足がしびれ、バイバイになって谷啓さん

のようにあの世行き。元気で今日あるのは、ヘットはんのおかげですと言いたかったんです。ヨイヨイ、グズグズから免れましたが、神様はよく知っています。武衛・カエル・ヘットと来たら、次ぎは私の番です。息のある間に、御一統はんに「オオキニ、サイナラ」

三十九回 塚脇 通成

十一月十五日、同じ団地内で新築に引っ越しました。アドレスも変わりましたのでお知らせ致します。

〒一一五〇〇五三東京都北区赤羽台一一五七一一五 電話〇三一三九〇〇一五三五七

三十九回 藤本 一郎

臨時さくら会開催さる

五月二八日 一時三〇分から、臨時さくら会が開かれた。

会場は二条城前の京都全日空ホテル「朱雀の間」、二七名が参集した。

さくら会は、京三中の最終、昭和二二年度卒（三九回）の同窓会、

双陵クラブでは最若手？とは言うもののはや傘壽を迎え、昨年6月の集まりでは、これが最後と申し合わせたところであった。

ところが今回、コロンビア在住の増田修君から四年振りに「最後の」帰国予定との連絡があり、これを機会に旧交を温め、惜別の情を交換する機会を持つべく、四方修君ほかの大変なお骨折りの結果、臨時さくら会が実現したもの。ところが開催間際になり、急病の為3名の欠席者が出たが、誠に残念な事に肝心の増田君がその中に含まれると言うハブニング（帰国（きこく）途次（とじ）米国で発病入院す）が発生、当初の開会の主目的に沿わぬ事になってしまった。しかし皆々の潜在的開会願望の底流のなか有意義なさくら会であったとの全員の感想に変わりはない。

会はずつのテーブルにわかれ、シャンパンの乾杯でスタート、うまい酒、豊かな料理を楽しみつつワイワイ、ガヤガヤ、談論風発（だんろんふうはつ）時の経つのを忘れ楽しい時を過ごした。その後全

員から何か一言ずつを！となり、それぞれマイクをもって、在校中の思い出、卒業後の出来事、近頃の健康、などなど皆の盛んな拍手に包まれながら披露された。

最後に恒例の「京三中 校歌」、「京三中 応援歌」を全員で合唱、大いに盛り上がったところで、名残を惜しみつつ、さくらの会の再度の開催と参加（全員の希望）を約して午後三時、解散した。

尚、案内状に対する欠席回答のうちの5氏の方々については、ご逝去の旨、ご遺族から連絡ありとのこと（四方君談）、皆で心よりご冥福をお祈り申し上げたい。

足立 晋君・坂 博介君・相良 孝昭君・中川 浩二君・細川 正三郎君

三十九回 細川正三郎

第三十九期生（旧さくら会所属）でありました父細川正三郎は平成二十二年十一月三十日八十才をもって他界いたしました。

生前は会報を読んだり同窓会に出席さ

せてもらうのをとても楽しみにしていた父でしたが、毎年仲間が減っていくのが淋しそうでもありました。でもついに父も亡くなり只々お世話になった方々に御礼申し上げる次第です。（長男 正三郎）

三十九回 山内 清

前略、いつもお世話になり有り難うございます。本人は只今病氣療養中で外出も出来ず家におります。月一回は病院に通っており主治医に診察を受けて薬をもらっている状態です。どうぞよろしくお取り計らいください。

（山内 清 内）

三十九回 弓削 治

謹賀新年 昨年の二月、温泉学会で鳴子温泉へ、六月弓削道鏡を守る会で瀬戸内海に浮かぶ弓削島へ、七月奥飛騨温泉へ、十二月には来春温泉学会開催地の熊野入鹿温泉の下調査に、それぞれ二、三泊の旅を楽しんで来しました。

初日受く手押車に身をまかせ 季也
恵方道八十路の杖の後に蹴く 季也

四十回 小野 裕史

思いがけない出会い

去年平成二十二年の春、クルーズで偶然三中の先輩にお会いしたこと、更にもうお一人とは昭和十九年半田市の動員先で亡くなられた落合先輩の妹さん（神戸市内在住）にお会いしたことでした。特に落合さんの妹さんとは船内ゲームで同一チームとなり、お互いにまさか、まさかの連発で話はずみしました。その出会いのきっかけは甲板でのゲーム中に私は京三中の出身ですが、貴女には旧制高女卒の匂いがしますと言ったのが最初でした。すると妹さんは「そうです、府一です」と言われ、兄も京三中でした。と、私はびっくりしました。そしてお兄さんはご健在ですか、とお聞きしたら「それがねえ……」と言われました。

続きは次号に

以上三中

以下山城

5回 荒川 太一

例年、暮れの餅つきに始まり、正月まで高校／大学生の孫十人とその親六人、そして私達二人の計十八人が我が家に集います。かつてはゲームが中心でしたが今は取り留めもない話題に話がはずみます。そこで気付いたのですが、お互いの年代によつては意味不明の言葉が飛び交います。一例をあげますが、おわかりですか。AKB, TKG, MKS, PK, TNP, (孫) TOB, IPO, SMA, TPP, M&A, (子供) PET, CPT, GOT, HbA1c, ICU(私達)【解説】歌手、卵かけご飯、マジで恋する5秒前、パンツ食い込む、低燃費、企業買収、新規公開株、一任勘定、環太平洋戦略的経済連携協定、癌検査、肝臓検査数値、糖尿病検査、集中治療室。序でもうひとつMKRK って知ってますか？

5回 田崎 央

何と自分でも信じられない「喜寿」なんて年齢になり、いささかうろたえています。

「こうすれば、こんなことができる」と、

若い頃、無意識にやっていたことを、体力や反応速度の衰えているのを忘れて、「がつくりする、ひやつとする」なんてことが多くなっています。

車の間を縫った車道の横断、小川や水溜りの飛び越え、転がってきたボールの投げ返し……などなど。

ちよつとした段差で躓いて、骨折なんて話も、我等の年齢では、良く聞く事故ですが、たかが一月程の寝たきりとか入院で、ほぼ確実に、筋肉の退化による認知症が忍び寄るようです。

このような年齢になったのにも拘らず、ある事情で、テニスの回数が急に増えました。AM/PM型も勘定すると、何と、週8〜9回、テニスコートに居るようになったのです。

こんな年齢で、馬鹿なことをしているとは思ったのですが、一月もすると、今まで届かなかった球へ、走れるようになったのです。

運動を継続すれば、喜寿であっても、運動機能が増進する……なんてことを、ある先端医療プライベートセミナーで、府

医療審議会会長の平澤先生（元府医大学長）に話したところ、介護リハビリ領域に重要な体験話なので、どんどんふれ回って欲しいとのこと！

後期高齢者医療費削減支援になるのかと、同窓会誌「双ヶ丘」に投稿させて頂く次第です。

読者の皆様、大いに身体を動かしましょう。

皆様の、運動機能溢れるご健康をお祈りいたします。

5回 木村 英生

今年満七十七歳。うつらうつらくでもないことを考える。世の中には無数の学校がある。無数の入学生、卒業生。そして無数の同窓会。同窓生は無数になる一方である。しかし、いずれはおさらばしてあの世に旅立つが、同窓会に届けを出すわけではない。母は満八十四歳で十四年前に死去。ところが卒業した当時の高等女学校から「同窓会」の通知がいまだに舞い込む。（そういえば戸籍上超高齢者の存在が新聞をにぎわしたことも

あった。)死者への案内、忘れかけていた「母」を思い出し感慨深い。卒業生名簿の整理は同窓会の幹事の方には大変であろう。いっそのこと、「同窓会誌」に訃報欄を設けてはどうか。新聞の死亡記事は閲覧率が高いというではないか。「同窓会誌」の人氣上昇、などと、うつらうつらに。

5回 野村 藤雄

私の3・11地震体験

大震災の被災者の事を思うと、体験談の如きは多少気が引けるが、当日夕方集合があり、久しぶりに神田の古書街散策を思い立ち、昼過ぎから出かけた。そして、神保町へ着いた途端地震に遭遇した。書店の細いノックビルが激しく揺れ、又道路が波打つのを初めて目撃した。会合は中止、自宅へ戻る事にする。当初震源は宮城県沖と言う事で、電車の運転再開を期待して目ぼしい駅伝いに歩いた。やがて交通機関は当然無理なことが判った。ホテルは無し、電話はバンク、自分の足だけが頼りである。結局神田から神奈川県川崎市

まで約三十二K(皇居の東が神田、ほぼ西に進み、渋谷から世田谷区を横断して多摩川を渡ると川崎市)を歩いて夜十一時に帰宅した。日頃のウォーキングのお蔭か、翌日に影響なかった。話は飛躍するが「方丈記」に京の巨大地震の記録がある、(京都とて油断はできぬ)著者鴨長明はルポライターの先駆である事が判った。来年は方丈記八百年で行事が京都で催されるとの事である。楽しみではある。

5回 前原 英彦

「双ヶ丘」読者の諸兄姉様

謹賀新年、一月に私達は結婚五十周年の節目を迎えます。お互いに(私七十七歳)妻七十三歳)健康に留意してエメラルド婚(五十五周年)を目標に暮らしたく思います。今年も何卒よろしく御願い致します。前原英彦・静代

昨年から『心室』を作りまして、覗きに來られた友人・知人に心から案内して説明をしたく思っています。その中味は私の七十七年の記録・原谷入植六十三年間の歴史と記録写真等による変遷・私の

生涯スポーツ歴史スケート五十八年の記録写真等々の資料・記録写真で私の心の部屋を作りましたので関心のある方は見に来て戴きたいと心からお待ちしています。乞観心室

5回 牧野 庄三

『昭和二十五年、高校グラウンド西端にあつた木造の蹴球部の部室、先輩からタバコを吸わされて蒼白になっていた時、運悪く先生に見つかった。先生曰く、「こんな所で吸って火事になったらどうするんじゃ、吸いたければ職員室で吸え。」タバコ人生の始まりだった。授業中、教科書を立てて、その陰で弁当を食べたり、プールにナトリウムを放り込んで大きな水しぶきを上げたりと、戦後の生活は貧しかったが、こせこせしない大らかな時代であつた。そうしてそれぞれに目的意識があつた。』

10回 岡部 孝夫

恩師井上隆夫先生を偲んで

井上隆夫先生に昨年お会いした時はお

元気でしたが、今年二月にご逝去され寂しい限りです。先生は人生の大半を高校の教師をされましたが、最初にクラス担任を持たれたのが昭和三十一年四月からの私達二年四組でした。私と先生とは一回り違いの卯年でした。当時、先生は若さにあふれて何事にも積極的で、体育祭の仮装行列や文化祭の演劇等には参加するだけでなく、自ら出演される程でした。放課後にはバットとボールを持って学校近辺の空き地でソフトボールをし、土曜日の午後には近くのお寺で焼きそばパーティーをしたものです。卒業後も二年四組のクラス会は二、三年毎に続けており、一昨年は桜の満開の時に先生の地元で宇治で行い、また今年位にやろうと云っていたところでした。

第十回卒業生は毎月第三水曜日の夜「山酔会」というミニ同窓会をやっておりますが、数年前から先生も参加される様になりました。酒の方も強く、酔いが廻るほどに山城高校時代の出来事をなつかしそうに話されていました。特に、野球部が昭和三十三年春の選抜に出場した

時の事を細かく思い出されて話されていたのが印象的です。おいしそうに酒を吞まれる先生の姿を思いつつ筆を措く事と致します。ご冥福をお祈り致します。

目的と目標

目的と目標は異なる。目的を達成する為に目標を持つ。例えば運動会で或る人を抜く。散歩であの橋まで歩く。目標であつて目的ではない。目標を持つことは比較である。たいがいの事は比較から始まるし、解かり易い。日々の動きの中でライバルがあることは目先の生き甲斐が得られる。ライバルをいかに見るか、その人の生き様でもある。必要悪と見るか、年齢と共に変化する。

10回 洞本 昌男

11回 伊藤 信子

山城サロン第48回歩こう会。新春は一月十六日、壬生界隈から世界遺産二条城を歩き、見学後新年会を開催します。(三十名参加)

環境科学と共に45年

12回 田中 英樹

私が環境科学に係わって四五年近くになります。この間私自身及び多くの人々の環境に対する認識は非常に変わりました。兵庫県公害研究所に入った当時には日本の経済は高度成長が始まりかけており、各企業は生産を優先し、未処理の煤煙や排水を猛烈な勢いで環境へ放出していました。当然、大気や河川・海域の水質は急速に汚染され、これが引き金となり水俣病やイタイイタイ病など人体被害まで派生しました。我々の喫緊した業務は環境浄化が主体となり「河川の生物学的浄化機能」「海域の赤潮発生機構の解明」などの研究に取り組みました。一方で、環境庁(現環境省)は大気汚染防止法や水質汚濁防止法の制定したことにより環境は徐々に清浄化に向かいました。最近の日本は「エコ・エコ」の大合唱となつていますが、大上段に構えずに自家用車の無駄な走行の自粛、家庭ごみの減量や節電など私たち其々が出来る範囲で環境負荷の軽減に寄与する行動を

とればよいと思います。

私の転機は1980年の半ばにJICA(日本国際協力事業団)の研修を受け技術専門家となつてからです。研究対象がこれまでの地域環境問題から地球環境問題に移りました。以後、私は世界の国々から派遣要請を受けて約三〇カ国に出向きました。タイ国の国立環境研究・研修センターの設立原案作成のための共同作業、ブラジル・パラナグア湾の富栄養化共同調査や森林やマングローブ林の伐採により環境破壊で荒廃した環境を修復するために発展途上国において環境調査や植林などの環境整備を指導してきました。しかし、発展途上国の貧民層の人々はかなり私たちの常識とかけ離れていますが、現地に入れば現地の風習や習慣に従うのが第一義であり、それらは逆に以後の指導方法に対して非常に参考になり、勉強になりました。

県を退職後、現在は今までの経験を活かして、県や環境関係の財団法人からの講師依頼により「地球環境問題に対する取り組み方」についての企業、大学・高

校や地域団体・NPOの人々を対象として講演活動を行い、また、環境専門誌に論文を寄稿しています。素晴らしい青い惑星である地球環境を保全し、動植物と共生できる環境を構築して次世代に引き継ぐことが我々の重要な責務でもあるのです。

13回 平井 隆

あの頃……。

統制経済がおわり、配給で貰う補助券なしでパンが買えるようになって、五、六年経った春、家内工業の工場で働きながら中学を出て山城高校へ入学した。一緒に働いていて、すでに山城に在校していた兄が「何もせんかったら、しょうもないで」といいバスケットボール部に入ることを勧めてくれた。兄の同級の塩谷先輩と会う筈が笠原先輩でなんだか怖くなり入部するのをためらった。全てに於いて遅れていた私は中間試験で成績不良の為、休部させられたが、磐先生の嘆願で救われ戻ることが出来た。仲間から毎日、レイアップシュートと勉強を教わった。工場で働いていたため、足腰だけは

強かった。二年になる前、まだ入学の決まっていないうち、今井君が東京合宿に付いて来た。負けないよう夢中で練習をした。先生から後に実業団住友金属のエースになる宮川先輩のコピーをするようにいわれたがとても無理だった。入団一年目で日本鋼管を日本一にした並川先輩から教わった並川式片手滑らし巻込型捕球術だけは身についた。三年生の後半、今日がバスケットを出来る最後の日という最終意識が出てきてもっと早くから日々、大切に練習すればよかったと悔いた。試験で赤欠点を取ったり、片想い失恋をしたり、初めて出逢うことばかりの高校生活であった。

そして今……

同窓会にいられたいただき、ミーティングに出席していると二十二年前に亡くなった兄の同級の方ともお話しが出来るようになり、ありがたいことです。最近、判った事は、高校三年間で知り合えたひとたちが、ほんの僅かであり、同じ中学出身の方でさえ最近、初めて出逢ったばかりに思える事です。

その一方、家庭では清楚な、可憐な、控え目なという形容詞が全く当てはまらなくなってしまう生活学習能力のバツグンの女性と、生活学習能力ゼロの自分が、カスガイであるはずの娘の援護もなく、こうるさくいわれながら暮らしている始末、子供まで成したなかなかのになんてやる？ 昔からこんなやつたら結婚せーへんかったのに
なァーシユンちゃん!!

18回 池内 一博

先輩・後輩で府庁旧本館の利活用

京都府庁の正面にルネサンス風の旧本館がある。明治三十七年に竣工し、平成十六年には国の重要文化財に指定された。現在、明治期の道府県庁舎で重文指定は五件。今もいくつかの事業部が執務する現役の庁舎は京都のみ。他は関係施設へ移設されたり、資料館へ転用されたりしている。

重文指定後、府ではこの館の利活用が検討され、三年前にその実動部隊が、府民参加の乗り降り自由のプラットホーム

方式で、京都府庁旧本館利活用応援ネットという名称で誕生。

現在、若いアーティストの作品発表の場としての「春・秋の一般公開」、ヨーロッパの市場をイメージした「こだわりマルシェ」の開催、京都の文化をテーマにした「連続講座」の開催、借料をいただいで結婚式やコンサート会場、等々。休む暇無く大活躍の庁舎となった。

その応援ネットの代表が、京都の町づくり、地域づくりに欠かせない地域計画建築研究所の三輪泰司先生。三中出身である。山城出身の私との先輩・後輩コンビで旧本館の公開事業を進めてきた。まさか六十歳を過ぎたこの年で、学生時代のクラブ活動が出来るとは。もし同窓でなかったなら、いらぬ気苦労が活動を阻害し、相手の腹を探ったり、駆け引きをしたり、互いのコミュニケーションづくりに時間も時間がかかったと思われる。三中・山城の絆が信頼を深め、事業を円滑に進めることができた。

「母校が同じということが、これほど有り難いとは」。

みなさんも敷居が低くなった府庁を一度覗いて見てください。旧本館は常時公開しています。

18回 加峯 悦子(旧姓土屋)

京都を離れてから

関東に住み始めてからもう人生の半分以上になりました。昭和五十三年三月、主人の転勤のため、家族四人で新しい土地「東京」にやって来ました。当初、耳にしたのが歯切れのいい言葉遣い、その上イントネーションの違い、関西弁とは殆ど逆です。それに習慣の違いにも大変戸惑いました。テレビも8チャンネルの関西テレビ(フジテレビ)だけ変わらず、他の放送局は番号が違い、覚えるのが大変でした。しばらくして関西の芸人達が東京に進出し始め、テレビに出て来て関西弁も段々と浸透してきました。ドラマも京都が舞台のサスペンス等が放映されて京都の景色がなつかしく郷愁を感じたものです。(現在も京都のシリーズ物は観ています)

京都を離れる時、無かった地下鉄。京

都駅、三条京阪の駅などの建物の変貌ぶり。文化施設も増え、神社仏閣なども一層整備されて久々に帰省した時、「ここは以前何だったんだろう？」と浦島太郎状態になってしまいました。

ただ変わっていないのは市街地の碁盤の目の道路ですね。これは分かり易い道路です。もう京都の事を知らない事が多くて「京都出身」とは言えないなあと思ってみたり、そうかと言って関東にもそれ程馴染んでいないような気もするし、根無し草のような宙ぶらりんの心境です。でも心の中では「私は京都生まれの京都育ちだもん！」と京都が抜け切れず、誇りを持ちながら、現在はこの横浜で暮らしています。

18回 河本 充

いつも同窓会誌にご尽力いたいただきありがとうございます。

前第4号で「バリに想う」を採り上げていただいた18回卒業の河本です。実は提案とうけとって載せたいのですが、先日とも同期の友人と話していると「双ヶ丘」

のことをしらないのです。

「へえーそんなあんのか、オレも欲しいな」と。まだまだそういう連中が多いので、何とか上手く配布出来る方法を考えねばなりません。その為には各理事のガンバリも必要ですが……。

そうすれば必ず寄付も含めて順調に運営出来ると思います。又、理事会等の折にもご検討下さい。では失礼します。

18回 佐々田芳枝

団塊の世代の私達が還暦を過ぎ、友との語らいの中に「老後」や「介護」と言う言葉が入ってくる様になりました。住み慣れた自宅で普通の暮らしをしたいと希望される高齢者のケアマネージャーをしておりますが、三月十一日の東日本大震災の発生は大自然の持つエネルギーの巨大さを目の当りに目せられ、平穏な生活を確認する事の難しさを改めて考えさせられました。しかも、その後、次々と報道される各界からの支援や援助、ボランティア活動は、それぞれの人が考えられた方法で素早いものでした。「有り難

う、次の世代でも大丈夫そうですね」と心からお礼を言いたい思いです。

神奈川に住む私にも京都の友人から救援物資(?)が届きました。品不足で仕事をしながら買い物ができない、そんな生活も無事に乗り越え、普段の生活ベースが取り戻せました。友の思いやりに感謝です。そんな人々の思いに負けない様、不安や淋しさを抱えた高齢者の笑顔が続き、安心な生活ができる様に援助のお手伝いをしていこうと思っています。

18回 穴戸 永徳

趣味「映画製作」

定年が二年延長され2015年三月末まで現職を続けることになっています。学年別の同窓会には高い出席率を誇って(?)いるので、近況をご存知の方も多いと思います。ということで、仕事のことではなく趣味の話を書かせて貰います。

昨年(2010年)は映画制作実践講座というのを受講して子供のような年齢の若者と一緒に短編映画を制作しました。

映画製作のイロハから始めて、八日間の日程で数分の作品を作る実習などをまじえて一通りのことを教わり、最後にグループに分かれて受講生の書いた脚本を実際に映画にしてみようというかなり大胆な企画です。

なぜこの講座を受講したかというところ、さらに一年前に授業で使う教材用のビデオをプロダクションに外注して製作することがあり、その現場に同行して製作過程を見ていたこと、そして今度は自分たちでそれを製作したいあるいはしなければならぬということから、映画(VIDEO)製作の全体を勉強したいと思ったからです。

動機は至ってまっとうなのですが、いざ製作に関わるとそんなこととは関係なしに純粋に映画製作に取り組むことになりました。とはいっても、実際に脚本を書き、演出し、撮影、録音その他の現場の作業をしたのはすべて若者達で、私は制作担当ということでスケジュール管

理、ロケ地の選定などのマネジメント業務を行いました。結果的には、私以外のメンバーが若者だけだったのでこの体制は進行をスムーズにしたと思われます。商業映画の製作では、制作部門は予算を握っているのに強い権限を持っているようですが、アマチュアの場合はほとんどお金を使わない(使えない)ので、そのような意味での権限は無いに等しい状況です。実際に映画製作をしていて感じたのは、メンバーの若者達が才能豊かで技術的な問題を含めて実に手際よく仕事をしてくれたことです。

無事完成した作品は地元の映画祭で上映され(多くの観客は関係者とはいえず)会場は満員で、キャスト・スタッフの舞台挨拶もあり、映画も結構好評だったのでみんなで気を良くしたものです。さらに映画はDVDに収録され関係者に配布されました。また、地元のケーブルTVでも取り上げて貰い、私も他のスタッフと一緒に出演して映画製作の苦労話・裏話を披露しました。

講座の活動が終わっても、講座の修了生が寄り集まって新たな映画制作に取り組む場も提供されているので、二本目の製作にも関わりその作品も上映会が終わり、現在はDVD制作を行っている段階です。

先のことは余り考えずに受講したので、同期の若い受講生との交流も続いており、この調子なら退職後も新たな趣味の一つとして「映画製作」と胸を張って言えそうな気がします。

・講座について興味のある方は以下のURLをご覧ください。

<http://www.etp.sanukieigasai.com/index.html>

<https://www.e-topia-kagawa.jp/img/bbe/BFE2011.pdf>

(チラシのSTEP1, STEP4の下の写真に筆者が写っています。お暇な方はお探しください。)

18回 深井 俊明

リタイアして二年が経過しました。現役当時医者から糖尿病予備軍と宣告されていたため、さっそくウォーキングを始めました。

自宅から日帰りで御室・京見峠・氷室・舟山など一人で気ままに歩いています。(愛宕山はきついため一回のみ) そろそろ飽きてきた頃に舟山(五山送り火の舟形)の裏の登り口に寂れた秋葉神社があり、数十年間人の手が入っていなかったで、勝手気ままに一人で掃除を始めた次第です。(秋葉神社とは全く縁がなく、その後判かった事は神社がある秋葉山の所有者は西賀茂の歯科医)

またそばを流れる若狭川もすこしづつですが、川岸の清掃をしています。(秋葉神社若狭川とも京都ゴルフ舟山コースの中の公道を通過して行きます)

現役時代とは違った世の中を見つつ、いつまで続くか知れませんが、少しでも世の中の役に立てばと思ひ過してしまします日々です。

18回 芳村 伸男

悪魔の辞典ではないですが、同窓会とは自慢話の会だと敬遠される人がおられます。確かに五十歳前後は功なり名を遂げた人に拍手を送ったりしました。でも同窓会に自慢話や愚痴など要りません。「俺」「お前」で呼び合うと不思議なもので、相手が高校時代の顔に見えてくる。なによりも出席出来た事を有り難く、幸せだと思う。そして何年か後の再会には、お互い今日と同じ顔で参加出来るように誓い合う。そんな齢になりました。

19回 長尾 茂

保護司になって

山城高校を卒業して、平々凡々と暮らして三〇年を過ぎた頃、ひよんな事から保護司を引き受ける事になった。

名前だけのつもりが、新任研修が終わるのを待って保護観察が始まり、それから15年。色々の人間模様を勉強させてもらった。

袖口から刺青を見せてやってくる人、

酒におぼれて命を落としてしまった人身元引き受けの親にも見放されて行き所を無くした人、薬物中毒やわいせつ行為、暴力事件等、10代から70代まで多い時には毎月5件を超える報告書を書く時もあった。

普段の生活では知ることのない裏の社会。壊れてしまった親子・夫婦の行きついた果ての事件。普通のオジサンには指導も助言もするすべを持たない。ただ、聞いて、聞いて一緒に迷うだけ。相手の話を聞く事が保護司の仕事だと思う。

そんな彼らも保護観察が終われば他人。時には本人や親からその後の進展や、近況を知らせてくれることがあると、心があたたかい。

近頃は薬物やわいせつ事件が増える等、犯罪の様子も変わってきたようにも思うが、育てる側の盲目的な愛情と共に金銭を渡すことが親子関係を保つ手段だと思ひ子離れできない親。それを当然と思ひ、親のスネをかじり、親の年金をあてにする大人になれない子ども。そんな問題の上にこの不景気の就職難社会。解

決の糸口もなしに再犯し、逆戻りしてしまふ事も多い。何とか更生、立ち直りを助けられる余裕のある社会になればと願うばかりである。

四国八十八ヶ所

19回 西田 史子

一念発起して、平松さん(圭子ちゃん)、飯田さん(さっちゃん)との三人で、月に一度の日帰りバスツアーでお遍路をすることになりました。

一回目が一月十九日で一番から六番まで。先達さんのお話を聞きながらバタバタと過ぎた一日でした。回を重ねるうちに何かを得ることが出来ればと思つていきます。一年をかけてのお遍路、無事結願できますように。

20回 桶谷 良

井上隆夫先生の訃報にふれて

残念ながら恩師がまた一人亡くなつてしまった。東洋史の横田滋先生と週替わりでコンピを組んでおられた西洋史の名伯楽井上隆夫先生が二月に亡くなつてし

まった。何回もの手術を乗り越えその度に井上隆夫先生の生への執着心を感じてきた。高校二年三年と甲高い声でわかり易く丁寧な西洋史を担当していただき、学生時代は実習助手のアルバイトで生徒部で仕事と学生の両立の厳しさと部活指導について強く厳しく教わったものです。また教員として母校に赴任した時には教頭としてお世話になった。一見怖そうに思える存在の先輩教員であり、後に校長職についた時には先輩校長として「頑張れや」と激励の言葉をいただいた。私ほど長く深くお世話になった人間はおそらくいないであろう。感謝の言葉しかありません。

山城高校に当時在籍した教職員でお酒を楽しく優雅に飲む会に誘っていただいた十二月の第二土曜日開催の「ひさご会」、現在会員は十五名、私は永久幹事であり、お世話することが恩返しの一つであるが、もう一緒に飲めないのが残念でならない。

井上隆夫先生ありがとうございます。ご冥福をお祈り申しあげます。

22回 藤井 幹世
「特別支援学校に勤務して」

高校教師になって三十二年、ラグビー部の指導一筋に歩んできた私が、三十三年目に京都府総合教育センターに勤務しました。もちろん分野の違う仕事で戸惑いがありました。が、無事二年で刑期を終え、福祉関係の学科のある現場にもどりました。ホッとしたのも束の間、一年で開校される八幡総合支援学校に勤務を命ぜられました。障害のある子どもの教育は初めてでこれまた戸惑い戸惑いの連続です。今までは教育とは発達させること、成長させることと単純に思っていました。が、障害のある子どもの中には身体がどんどん衰え、今までできた事ができなくなつて行く子どもがいます。その子どもに何がしてやれるのか、教育って何だろうと考えることがあります。特別支援教育はやはり教育の原点だなあと、この機会を与えられたことに感謝し、勤務に励んでいます。

京都新聞社の御好意により、平成八年六月に新聞紙上に連載されました「半田動員の記録」を掲載させていただきます。

『防人の詩』

さきもり うた

(五)

京都三中の生徒たちが到着した愛知県半田地区にある中島飛行機半田製作所の宿舎は、十五畳の一部屋に十四人の「少し詰め状態」の部屋割りになったと、というが、到着の翌日からの彼らの日課をめぐって同中学4年生の記録文集は――「自分たちの入った寮の位置は武豊線乙川駅から徒歩で約三十分間のところにあり、丘上に建つ9棟の宿舎は各15室に分かれていた。そして、各棟のすぐ前には千五百人収容の食堂と炊事場が置かれ、さらにその隣に五つの浴槽のある浴場、事務所などがならんでいた」「一日の始まりは午前五時半の起床と体操から

幕を開け、すべてが軍隊式で規律の重んじられる日課となっていた。洗濯場も完備されていたが、水道は完備されていなかったため水はにこっており、生水は絶対に飲めない状態であった。参考までに到着三日間の食事のおかずは六日朝がみそ汁、昼キウリのもみ瓜、夕食にカボチャとエビ、七日は朝にみそ汁、昼キャベツに豚肉二切れ、夜はジャガ芋、そして八日の朝はみそ汁、昼が玉ネギ、夜にジャガ芋と玉ネギのおかずとなっていた」「日課の方は到着翌日の七月六日に朝食後、まず作業衣と帽子の支給があり、午後からは平安神宮旗の奉戴式、生徒受け入れ式、工場長の訓示、京都府と愛知県知事の祝辞披露などの行事が続いた。その後は各自が部屋に帰り、身辺の整理で一日が終わった」「翌七日、朝食後に軍人勅諭の奉唱があり、その後は舎外の清掃作業に当たり、午後からは校長先生の舎内検閲が行はれた。その夜は消灯後の全員が眠りについた午前一時ごろ、突然に警戒警報が発令され、我々は命令に従って(退避)行動に移った」「そして、翌八日

は大詔奉戴日であった。このため奉戴式が挙行され、自分たちは京都府からの動員三校(烏丸商業、園部中)うちそろって、この式に臨んだ。式後は工場見学に移り、午後にも広大な工場内を見学した。このとき、ニュース映画の撮影がおこなわれ、自分たちは『学徒来る』という題の映画に行進の模様や、校歌もあわせて録音された」「工場見学では機の主翼、胴体の組み立て作業などを見て回ったが、さらに機そのものの組立工場に回ると、雷撃機の機体が目の前を流れ作業で行われていた。そして、最終の工程となる塗料を塗る現場では日の丸を描かれたばかりの雷撃機が、発動機も備えて威容をみせていた」「翌九日は午前中に防空壕掘りが下命された。午後にも防空壕掘りを続行したが、万一のときにはここが自分たちの生命を託す場所になるとあって全力を挙げて完成した。夕刻、宿舎に帰ると『サイパン玉砕』のニュースを知らされ、全員が南方に向かって進出した」「翌十日、きょうも工場見学となった。こちらの工場では艦上攻撃機『天山』と高速偵察機

『彩雲』の主翼の心棒や、魚雷を抱く機器、および機車の輪などを製作し、併せて仕上げるもので、工場内には研磨の機械や旋盤など多数の機械類があった。そして午後には技術者養成所に移り、ここで工作機械や計器の説明を受けた後、いよいよ実習に取りかかった。「まずはハンマーのタガネ打ちから始まった。だが、だれもが手ばかり打って意のままにならなかった。それでも懸命に頑張っているうちに少しずつ上手になってきた。あまり緊張しすぎて硬くなっていたのか、緊張は欠かせないがあまり硬くなりすぎても駄目だということが分かってきた」

このようにして京都三中の学徒たちは、動員地での一週間の慌ただしく過ごした後、いよいよ十三日から、各自が指示された配属工場に入り、航空機生産の現場での「産業戦士」としての第一歩を踏み出したのであった。

(六)

愛知県半田市の中島飛行機半田製作所

に集団動員された京都三中の勤労学徒たちの1日は、午前五時半の起床から始められた。

彼らは起床後の洗顔、体操、朝食などを終えるや宿舎をあとに配属工場に向けて、隊列を組んでの出発となった。これから学徒たちの配属工場となった山方工場では海軍の高速偵察機「彩雲」の製造が急がれていた。これら学徒隊の一人、同中学三年生、岡田成穂君（十五歳）は――

「山方工場の門衛所のタイムレコーダーは出勤時刻、午前7時半を示していた。定刻8時から作業が始まるのだが、高速偵察機「彩雲」の翼を組み立てるこの職場には、どことなく緊張感がみなぎっていた。この翼組み立て職場には工場長、技師長の配下に技師、技師補、技手、技手補など数多くの役職があり、大学、高専出身の予備学生や技術見習士官、それに海軍監理官などの顔もみられた」

「作業の現場では浅野組、椎名組といった『組』の組織がつくられ、そのなかにいくつかの『班』が配属されていた。自分の配属を命じられた班の班長は生粋の

中島飛行機養成所出身の技術者で、どちらかといえば無口な方でそれまでの間、中島飛行機の工場現場で鍛えられてきた経歴の持ち主であった」

「この自分たちの班の作業は翼の冶金工具に架せられた基本骨格に、前縁部と後縁部に油圧部品の取り付けられることから、その枠を焼鈍したりベットとエアハンマーで鋳打ちする仕事であった。これは轟音のなかでの力仕事で、わずかも力をゆるめると、鋳が正常につぶれないためオシヤカ（不良品）をつくり出すことになるのだった」

「このため正面から継続して鋳を打つのと同時に、後方では工員の方が鋼鉄板の当て板を使ってリベットの末端を押しつぶすわけで、どちらともびったりと呼吸が合っていないければ正常な作業の取り組みはできなかった。だが、慣れない間は失敗することも少なくなかった。当然ながら工員さんにはひどくしかられた」

「しかられることでは、現場作業の中身のことよりも工場内を巡回する海軍監理官の仕打ちに閉口した。監理官は自分

たち三中生に『学徒が生産を怠けたならば、飛行機の増産はどうなるか。』聖戦を勝ち抜くためには・・・』などと威勢のよい怒号を浴びせながら、やがて『一列に並べ』と命じるのだった。

「そして、列の片方からビンタが飛んできた。いわゆる鉄拳制裁であった。この鉄拳制裁のため級友の中には中耳炎を患った者も出てきた。だが、工場のなかでは特に問題にもならず、それらは日常茶飯のこととして受け流されていたのだった」

「制裁は、この鉄拳制裁だけでなかった。それ以上に自分たちを震え上がらせたのが下士官たちの監督官による海軍精神注入棒による殴打であった。これは太い櫂の棒を手にした下士官たちが絶え間なく現場を巡回しているもので、休息所や便所でわずかでも息抜きをしている者を見つけると、見つけ次第、まず一撃を加え、さらに息もたえだえになるまで制裁を加えるのだった」

「この一撃で腰が砕けたかのようになった工員さんがいた。こんなことを自分た

ちの目の前でみせつけることで『お前たちも、さぼったらこんなにしてやるぞ』といわんばかりの顔付きに、学徒たちのだれもが震え上がったのであった」

(七)

愛知県の半田市に集団で動員された京都三中の勤労学徒の日課をめぐっては、現地を訪れた京都新聞の記者の筆で『現地視察記』として、それが紙面にも報道されていた。

この記事には「頑張れ、三中生」「勤労戦線の京学徒」などの見出しのもとに以下のように報じられていた。「中部重工業の第一線、こつ然として眼前にひろがるは中島飛行機製作所の大殿堂だ。広さ数万坪、〇〇半島の一角、秋色の大平原に我が重工業生産陣のたくましい姿がひろがる。ここに今年七月、動員された京都三中、園部中、烏丸商業の三・四・五年生が日夜、油にまみれて頼もしい敢闘を続けている」「記者は勤労課員

の案内で工場に入る。まず目につくのは真紅の丸地に『学』の字を左胸に。三々五々、忙しそうに棟から棟に渡り歩く動員学生たちの姿だ。かつて鞭を手に校門をくぐった、学徒たちが、いまはジュラルミンをわしずかみに、友人と何事か熱心に議論しつつ、もうすっかり自信に満ちた産業戦士の表情で行き過ぎて行く」

「はるか一棟の前に白銀色に輝く新鋭機が、まさに誕生せんとしてつつあった。その胴体に、翼に三十名ほどの学徒が最後の仕上げに懸命だった。みれば一、二名の技術者を除いてすべてが学徒である。この新鋭機こそ、紙の一つ、一つから細部に至る精巧な部品まで、すべて学徒の烈々たる闘魂と高い知性に支えられた入魂の飛行機であった」

「この機を前に勤労課員は説明した。『何分、学徒の受け入れは最初のこと、いざ作業というとき、正直なところ心配をしていました。だが、みて下さい。この立派な飛行機は最初の部品から完成に至るまで、ほとんど学徒の手になったものです。この学徒の敢闘ぶりを

みて他の工員の心構えも変わり、新しい闘魂の職場が現出したのでした」と「この工場内に一步、足を踏み入れるや、ジュラル板をたたくハンマー、打鋸機、圧板機などの轟音と、立ち働く学徒の敏活な姿に文字どおり、一刻でもはやく、一機でも多くの活気に充満した気迫が感じられる。一つ、一つ学徒の手で造り上げられて行く精巧な部品と、次から次へと送り出される速さは驚くばかりの光景である」

「その工場の柱には『頑張れ、三中生』『三中生の名誉を賭して』と大書した紙が張り出され、集団作業の能率を振起している。ときには工作の過程で、指導に当たる技手の説明をすばやく理解し、現場使用の機器なども創意を生かして補強するなど頼もしさもみせつける日々となっている」

「これら学徒のなかには、鋸の打ち方もすでに熟練工並みの者もみられ、その熱意と努力は工場側を驚かせる者もみられた。また、三年生の一人は整備員がどうしても出来ない、という電気装置

を一目みるや『それは自分にやらせて下さい』と申し出た。そして、三時間にわたつての懸命の作業の結果、見事に完成した。これには整備員たちも『これだから学徒にはかなわない』と賞賛を浴びせていた」

「こうして動員以来の精神的、肉体的、技術的困難を次第に克服し、学徒たちは一機でも多く、一刻でもはやくつくり上げることに、いま頑張っている。巨大な棟を背にヤスリを片手に、翼上にすくと立つ学徒の誇らしげな胸を張った姿。その気こそ、仇敵、米英の弾幕を切つて体当たりによく進する機なのだ。それなればこそその敢闘の意気はいたるところの現場にみることができた」

芳志合計（2010年9月20日～2011年6月30日）

前期より繰越額	650
当期受入額	553,500
印刷・製本代	237,000
通信費・手数料	106,250
（郵便振替口座）6月30日現在	416,020

強い同窓会をつくりましょう

編集部 高林 藤樹

柱が一本あるとします。目印にはなるかも知れませんが、それ以上の働きは殆ど期待出来ません。

それでは二本ではどうでしょうか。二本あれば、その間に幕を張って隔壁をつくる事が出来ます。幕は物を隔てたり、区別したりできるので、一本の柱にくらべてその働きは格段に飛躍します。しかし、二本の柱では幕や壁は倒れるという心配があります。

次に柱を三本にすると、ここではじめて安定という状態が生まれます。不安定や中立に比べて安定は完成を意味します。あの巨大なスカイツリーも三角形から出来ています。

さて、物事には三という発想が大きい力を発揮します。よく言われるのは、真善美の三つです。また、知徳体ともいわれます。組織にあつては三要素として名簿と会計報告と機関誌がこれにあたると

されます。今、我が同窓会は残念ながらこの三要素がすっかり機能していません。

昭和二十三年に学制改革が施行され、PTAという方法が輸入されました。PとTを両輪として学校を引っ張るというわけです。しかし、車は両輪があればうまく走るでしょうか。否、車軸があつてこそ成り立つのです。その車軸が同窓会ではないかというのが、私の言い分です。

師の恩は山よりも高いと言います。又親の恩は海よりも深いと言います。しかし、学校に於いては教職員や保護者が子どもに関わるのは何れも数年です。

これに対して先輩後輩の絆は永久です。遠い先輩が築かれた栄誉・名声を後代の我々は自分の誇りとし、又、鑑とします。そして消えることがあります。この縦のご縁を紡ぎ繋ぐのが同窓会ではないでしょうか。

各年度では同期の出会いをいつまでも暖かい友情の輪として残そうと、懇親を深めています。もう一歩進んで学年の壁を越えた出会いを太い絆として強く持

ちたいものです。後輩が意気盛んに燃えているときは大いに祝福し、拍手してやりましょう。しかし、逆に力弱く消沈しているならば、元氣よく奮い立つように応援してやろうではありませんか。我々自身が親心・兄心をもっと持たねばなりません。ではどうしたら？ それは一人一人が熱い母校愛を持つことです。もっと具体的に言えば、母校に心を寄せるとは即ち機関誌を読むことです。機関誌を読むことで冷めかけた郷愁もまた燃えてきます。さらには是非投稿してください。書くことで記事は増え、ページは賑やかになり、コミュニケーションが出来上がります。

「応援団が勢いづけばチームも燃える」のではないのでしょうか。同窓会は母校の応援団です。声を大にして母校を応援しましょう。母校愛は膨らんでやがて祖国愛に繋がります。それから世界愛・人類愛となるでしょう。

編集部から差し上げるハガキに是非お返事を下さい。お待ち申しあげています。

各期・各会の報告

◆山城陸友会幹部会（十月十四日、於・ミューンヘン）

◆山二会（十月十五日、於・

◆福互会（十月三十日、於・前原方、出席八名。恒例の芋掘りは雨のため実施出来ませんでした。が、話題は大いに盛り上がり予定を過ぎてやつと解散しました。乾杯の発声で「来年もくるぞー」と叫んだのがうけました。

◆双陵クラブ

◆一一・一一の会（十一月十一日、於・西陣魚新）参加四十六名。



◆山城第十二回卒業生卒業五十周年記念同窓会（平成二十二年十月九日、於・京都タワーホテル、参加七十名）

世話人代表、小林正幸さんは、「卒業して半世紀、懐かしい顔ぶれが集まっている同窓会。昔を偲んで楽しい一時を過ご



しましう。と在校當時を振り返り挨拶しました。

テーブルでの談中、十組のクラス毎に卒業アルバムをブロッジェクターでスクリーンに大きく映しだ

し、青春時代の自分の姿を参加者一人一人が紹介し合い、「前列の左から二人目は私です。」「エッ、本当に！」等と大いに盛り上がりました。五十年前「良き師、良き友」に恵まれたことに感謝しつつ、校歌を斉唱し、再会の喜びを実感した同

窓会となりました。

◆山城第二十回卒業生還暦同窓会（平成二十二年十一月六日（土）、於・新阪急ホテル、参加七十五名）

全国各地は勿論アメリカからも参加頂いた同窓生もいました。会場が狭く窮屈ではあったが、通路も確保出来ないくらい詰めていただいた。そのせいかステージで話をする人に集中でき、大いにもりあがった。山城高卒業生のもつ昔ながらの連帯感が感じられ、それぞれが過去を振り返り、また未来を語り合う事が出来ました。この日は恩師の出席を要請せず、自分達だけで、過去を振り返り、また未来を語り合うことにしました。この日ばかりはリストラや失業、それに成人病等の暗い話は抜きにして、老後の生き方や同窓会の在り方・運営についても話をすることができました。お酒も十分いただいた後の二次会も行き来が全く出来ないくらい多くの方に参加して頂きました。昔のペアーで、あるいはグループで、それぞれに話しが弾んでいました。自由奔

放で我が儘し放題の少年時代から、たがいにはオーラさえ感じられる個性溢れる壮年に成長したようです。今後は祖父育(孫の保育)をしながら、人生を優雅に楽しく生きていきたいと願いながら再会を約束し、それに商業科卒業生の会とのドッキングを夢見ながら家路につきました。

今回、我々幹事の中に大型トラックの運転を生業とするものの軽トラックのごとく小回りよく、専門家であるかのような便利屋さんの存在があり、転居先不明者が大幅に減少した。一同より永久に幹事を命ぜられるのも納得がいく。三年ごとの開催を二年ごとに改め、次回は百人以上集めると豪語して再会を誓った。

関東東北大震災の惨事を教訓に、今後我々に何が出来るか、何をしなければならぬかを、みんなで考えようではないかと提案する計画である。(桶谷 良)

◆京三中麗々会 (三十六回) 平成二十二年
年度同窓会 (二〇一〇年一月二一日
(木) 於・ホテルモントレー京都)



◆京三中三八会

(平成二十二年
十一月二十九日)



◆山城15回新年会 (平成二十二年一月
二十二日、於・楽庵)



◆双陵クラブ総会 (平成二十三年四月十
日、於・タワーホテル、参加四十五名)

今回の参加者は四十五名で、最年長は31回の森昌一氏で、また最遠隔地からの参加はこれまた森氏で横浜からの参加である。因みに第二位は同じ横浜から参加の34回伊藤朗氏、第三位は松本から参加の38回山村泰彦氏であった。双陵クラブは当初三百人の会員であったが、「新入会員の無い会」の宿命で出席者も漸減し、淋しい限りである。



◆平成二十三年度京三中・山城高同窓会
年度理事総会（平成二十三年四月二十九
日、於・タワーホテル）

会 長 森 貞男

副会長 高林 藤樹

副会長 今井 正治

副会長 洞本 昌男

副会長 渡部 隆夫

常任理事 丹保 重雄

常任理事 高柳 久子

常任理事 高橋誠一郎

常任理事 伊藤 禎彦

常任理事 中村美知子

監 査 高見 潔

監 査 三中西久雄

学校長 北沢 和夫

副校長 細野 吾

同窓会総会と銘打てども出席者六十名
とはいかにも少ない。会員は三万五千人
である。代議制で理事のみの会である
というが、それでも理事は二百人もい
るのである。議案はしゃんしゃんと通
過。役員の改選については全員再任と
なる。



◆第十一回八八会（平成二十三年五月
二十二日、於・西陣「魚新」）参加、十四名、
参加者中最遠隔地は北海道から参加の廣
谷氏でした。

写真の前列
右より

高井、貴志、

西野、村山、

江畑、後列

右より吉田、

山内、佐藤、

廣谷、酒見、

浅野、村上、

森田。（後列

左端は編集

部の高林）

十八回は昭和

十八年に卒業

したので会の名も「十八会」と称してい
ましたが、傘寿になったのを契機に会の名も
米寿を目指そうということで、「八八会」と
改名しました。今度は米寿も目前となり、
また改名しなければならなくなりました。

寄付者芳名

自二〇一〇年九月二〇日
至二〇一一年六月三〇日

31 小野浩臣・2 江龍昂・39 山口延男・34 高橋誠・
39 高橋一雄・39 戸野生幸・37 谷本岩夫・39 坂根寛・
38 下山茂・38 神原与四郎・29 道康康之助・38 川
口隆也・38 金山政喜・38 小針敏伯・38 大町義治・
32 鈴木富二・38 高野浩一・33 八手達郎・37 平
岡静哉・31 岡田新・36 眞須壽一・38 一海知義・
39 押谷誠之助・37 星佐義朗・39 野間康治・35 大
島達也・38 佐々木成夫・34 山村中郎・37 岡浩三・
38 村上盛彦・39 酒井大蔵・38 山村泰彦・37 中村
勝美・36 篠崎徹・39 塚脇通成・37 戸田忠男・36
河本昭・39 四方修・39 松阪光一郎・39 原田止男・
39 赤間義男・29 小池稔・38 田中寛安・31 平井邦男・
38 大塚樹・39 新谷物基智・36 山本清行・37 前田
利典・38 岡田喜三・38 竹本和生・34 東野裕・38
大山原康夫・38 奥重行・37 藤村恒雄・29 細見正
次・34 木茂・39 徳永良夫・38 橋本弘次・35 奥
照夫・35 荻野一彦・38 島添昭三・37 松村昭・36
高橋瑠璃・39 美松信幸・32 前田弘・32 高崎三之
34 伊藤朗・39 沢田治雄・26 松村多美男・26 同窓
会一同・38 小畑修一・6 福地諒夫・5 裏戸茂男・
7 鈴木和子・35 松村篤之介・13 平井隆・15 石原
中郎・18 神田敬一・18 佐伯節子・10 洞本昌男・

18 河本充・18 川中幸・18 北清水稔・18 沖靖彦・
18 岩田康子・19 寺石剛・18 中村純二・18 今中友子・
1 押谷誠之助・18 藤原清美・4 乙部秋良・18 片
野道子・18 山田恵子・18 佐藤節子・18 佐々田芳
枝・18 柴田昌彦・18 梅原健一・7 松尾稔・15 伊
藤浩介・18 稲本あや子・20 人羅賢司・5 木村英
生・19 藤根博子・5 岩城陽子・19 大前進・真理子・
19 中村良樹・恵・19 十井克巳・19 太田幸男・19
出納員子・19 奥久輝・19 田中博和・19 一の橋重
子・19 松本直道・19 向山進・19 平田信廣・19 平
松圭子・18 深井俊明・38 一海知義・18 宮沢裕子・
18 谷口昌男・19 安達俊二・19 飯田(田中) 幸子・
19 石田元一・19 伊藤(菅本) 道子・19 稲岡安守・
19 大谷(八木) 紀子・19 大西翔史・19 岡本美知
子・19 角田安博・19 金井正菜・19 佐川範雄・19
長尾茂・19 中山幸雄・19 畑(寺崎) 通代・19 布
施(竹下) 道子・19 船越(今村) 周・19 本郷喜
志男・19 前口精一郎・19 吉岡正博・19 吉信厚子・
19 瀬川司・15 加藤孝彦・15 遠藤圭子・5 小林愛
子・19 川本晴海・18 島田勇子・18 田中春美・19
牧野信夫・19 石垣知子・10 出納止彬・37 一色逸
雄・19 小尻利治・19 服部一仁・18 真枝康子・同
窓会本部・35 大島達也・35 藤本泰雄

編集後記

◆本号よりサイズが変わりました。従来は(創刊号〜4号) A5判でしたが、B5判になりました。

◆「双陵クラブ」会報7号は「双ヶ丘」に合流して、「双ヶ丘」5号となります。双陵クラブも同じ京三中・山城高同窓会なので、今後は充実した運営が期待されます。

◆誌代は従前通り無料ですが、引き続き篤志家の浄財を仰ぎたいと考えています。大方の御理解をお願いします。

京三中山城高同窓会誌

「双ヶ丘」第五号 (非売品)

二〇一一年七月一五日 発行

発行人 会長 森 貞男

編集長 5回 高林 藤樹

次長 18回 伊藤 禎彦

会計 26回 松村多美男

お詫び

◆本誌第四号の「西陣界隈の映画館」に関するエッセイ及び写真は、山城高校映画部OB会が2010年2月に発行した同会機関誌「MONTAGE第11号」より同誌関係者の同意のもとに掲載したものです。この旨を編集部の名において、誌上に掲載すべきでしたが、欠落したまま発行されました。深く反省し関係者にお詫び申し上げます。(編集部)